

# 史跡 土佐国分寺跡

現状変更等に伴う発掘調査概要報告書第3集

1989・3

南国市教育委員会

# 史跡 土佐国分寺跡

現状変更等に伴う発掘調査概要報告書第3集

仁王門解体修理・庫裡増築  
参道改修・市道国分3号線改良  
に伴う調査

1989・3

南国市教育委員会

## 序

土佐国分寺跡は、高知県における代表的な古代寺院跡で、奈良時代から平安時代にかけての国分僧寺跡として大正11年10月12日に国の史跡に指定されています。寺院跡は現在、四国八十八ヶ所第二十九番靈所として法燈が受け継がれ、真言宗智山派宗教法人国分寺の境内地等となっております。

寺院跡の土壘状地形や書院内庭園の塔心礎、平安前期作とされる伝世の梵鐘(重要文化財)、境内地に散布する古代瓦のかけらなどからは、かつて荘嚴な寺院が建立されていたことを彷彿とさせてくれますが、内容等についてはこれまで未解明な部分が多く、地下遺構等の確認の必要性が残されておりました。

このため南国市教育委員会では、国分寺の全面的な協力を得て、今後の史跡の保存方策を検討するための基礎資料を得ることを目的として昭和62年度から発掘調査を進めており、本年度を含めた2ヶ年の調査により、寺院跡に関する具体的な手掛りが得られつつあります。伽藍配置などの様相が鮮明になることも間近であろうと期待されます。

本書は、土佐国分寺跡における最近の史跡等現状変更に伴う発掘調査成果をまとめたものであります。いずれも小範囲な調査ではありますが、今後の調査に指針となるような貴重な所見が得られるなど、土佐国分寺跡関係資料として重要であると考えます。このような調査成果を基にして今後共、史跡保存方策の検討などに積極的に取り組んで参りたいと存じます。

最後に、調査にあたりご指導いただいた文化庁並びに高知県教育委員会、終始理解と御協力をいただいた林廣裕住職をはじめとする国分寺関係者の方々、地元国分地区の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成元年3月30日

南国市教育委員会  
教育長 鈴江 廣幸

## 例　　言

1. 本書は、史跡土佐国分寺跡(大正11年10月12日国史跡指定)の現状変更（仁王門解体修理・庫裡増築・参道改修）及び市道国分3号線改良工事に伴い、南国市教育委員会が実施した土佐国分寺跡の発掘調査の概要報告書である。

2. 調査は南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会文化振興課（埋蔵文化財班）の協力を得て実施した。

3. 調査契機及び発掘調査期間等については、以下のとおりである。

仁王門解体修理（昭和60年11月11日～11月15日・90m<sup>2</sup>）

庫裡増築（昭和62年8月20日～9月10日・100m<sup>2</sup>）

参道改修（昭和62年11月9日～11月30日・120m<sup>2</sup>・参道1）

（昭和63年9月6日～9月9日・30m<sup>2</sup>・参道2）

市道国分3号線改良（昭和62年9月21～9月30日・169m<sup>2</sup>）

（昭和63年9月16日～10月31日・80m<sup>2</sup>）

4. 発掘調査は、高知県教育委員会文化振興課主幹山本哲也（庫裡増築・参道1・市道改良）主事出原恵三（仁王門解体修理）・主事岡本桂典（参道2）・主事吉原達生（市道改良）が担当し、調査事務は南国市教育委員会社会教育課主事浜田清貴が担当した。

整理作業等は調査後に行い、昭和63年度に概要報告書として成果をとりまとめた。

5. 本書の編集は、南国市教育委員会及び担当調査員の協力を得て山本が行い、執筆は以下のとおり分担した。なお、「第Ⅲ章仁王門解体修理工事に伴う調査」については、出原恵三が作成した調査実績報告書を基に岡本が加筆編集した。

第Ⅲ章（仁王門解体修理）　岡本・出原

第Ⅲ章（庫裡増築（3）大型土坑出土の土器について）（参道改修 参道2）　岡本

その他の章・節　山本

6. 整理作業・報告書作成等においては、下記の方々の協力を得た。

記して感謝の意を表したい（文中敬称略）。

山中美代子　山本裕美子　大原喜子　宮本幸子　白木由里　矢野　雅　松木富子

竹村延子　井上博恵　楠瀬憲子　高橋千代　岩本須美子

7. 発掘調査においては、文化庁記念物課（史跡部門）をはじめ高知県教育委員会、地元国分地区、国分寺に全面的なご協力をいただいた。また、林廣裕住職をはじめ国分寺の関係者の方々、現場作業員としてお手伝いいただいた地元の皆様方には、いろいろご協力・ご援助をいただいた。文末ではあるが、心からお礼申し上げたい。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過 ······	1
第Ⅱ章 史跡土佐国分寺跡の沿革 ······	3
第Ⅲ章 調査の概要 ······	5
1. 仁王門解体修理に伴う調査 ······	5
(1) 調査に至る経過	
(2) 基本層序	
(3) 検出遺構	
(4) 出土遺物	
(5) 小結	
2. 庫裡増築に伴う調査 ······	10
(1) 調査の方法	
(2) 基本層序	
(3) 検出遺構と出土遺物	
3. 参道改修工事に伴う調査 ······	16
(1) 参道1	
(2) 参道2	
(3) 検出遺構と出土遺物	
4. 市道改良工事に伴う調査 ······	27
(1) 調査の方法	
(2) 基本層序	
(3) 検出遺構と出土遺物	
第Ⅳ章 まとめ ······	33
1. 遺構 ······	33
2. 遺物 ······	36

## 挿 図 目 次

- F i g. 1 土佐国分寺跡位置図  
F i g. 2 調査地区位置図  
F i g. 3 仁王門地区平面図  
F i g. 4 仁王門地区平面面  
F i g. 5 仁王門出土瓦  
F i g. 6 庫裡調査区平面図  
F i g. 7 庫裡調査区土層断面図  
F i g. 8 庫裡調査区 SK 2 出土遺物 1  
F i g. 9 庫裡調査区 SK 2 出土遺物 2  
F i g. 10 参道 1 調査区平面図（金堂前参道）  
F i g. 11 参道 1 調査区平面図（鐘楼周辺・S B 1）  
F i g. 12 参道 2 調査区  
F i g. 13 参道出土瓦 1  
F i g. 14 参道出土瓦 2  
F i g. 15 参道出土瓦 3  
F i g. 16 東市道調査区（T R 1 ~ 5）  
F i g. 17 東市道調査区（T R 6）  
F i g. 18 東市道出土遺物  
F i g. 19 東市道出土瓦  
F i g. 20 土佐国分寺跡第二次調査  
    僧坊跡検出状態（T - 3 調査区・南西から）  
    S B 1 検出状態（T - 5 調査区・東から）

## 図版目次

- P L . 1 土佐国分寺跡遠景（南西から） P L . 17 大型土坑検出状態（南から）  
調査風景（金堂から参道方向にかけて） 同上（北西から）
- P L . 2 仁王門調査前（西より） P L . 18 参道2調査区（南西から）  
礎石検出状態（西より） 遺構検出状態（中門・東から）
- P L . 3 仁王門溝跡検出状況（西より） P L . 19 参道2遺構近景（西から）  
仁王門溝跡（西より）
- P L . 4 仁王門出土遺物 P L . 20 溝状遺構疊出状態（南西から）  
調査区北壁土層堆積状況（南から）
- P L . 5 庫裡調査区（調査前・南東から） P L . 21 参道検出線刻瓦  
庫裡調査区（遺構検出状況・東から）
- P L . 6 庫裡調査区全景（東から） P L . 22 参道検出線刻瓦  
S K 2 検出状態（南から）
- P L . 7 S K 2 遺物出土状態（南西から） P L . 23 T R 4（西から・東はT-2調査区）  
同上（南から） T R 6（西から）
- P L . 8 庫裡調査区 S K 2 出土遺物 1 P L . 24 T R 6 遺構確認状態（南より）  
T R 6 遺構検出状態（南より）
- P L . 9 庫裡調査区 S K 2 出土遺物 2 P L . 25 東市道 T R 6 出土遺物
- P L . 10 庫裡調査区 S K 2 出土遺物 3
- P L . 11 庫裡調査区 S K 2 出土遺物 4
- P L . 12 庫裡調査区 S K 2 出土遺物 5
- P L . 13 S B 1 検出状況（北東から・左手は現鐘楼）  
参道1調査区全景（金堂より仁王門方向を見る）
- P L . 14 S B 1 挖形（北側掘形・南東から）  
同上（南側掘形・北から）
- P L . 15 S B 1 挖形（南側掘形・東から）  
S B 1 検出状態（手前T-4調査区・南東から）
- P L . 16 調査区近景（金堂前・東から）  
同上（南から）

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

史跡土佐国分寺跡は、南国市国分546他に所在する国分僧寺跡で、大正11年10月12日に国史跡として指定指置が講じられている。遺跡の現状は、宗教法人国分寺寺地・畠地及び水田地・宅地（民有地）となっている。史跡指定範囲は、土壘状地形によって囲まれた国分寺の境内地と隣接地である畠地及び水田地等であるが、指定区域外の周辺の畠地・市道・農道等についても寺院跡関連遺構の所在が推測され、土佐国分寺跡の範囲であるとみなされている。

史跡指定区域内に所在する宗教法人国分寺（真言宗智山派）は、四国八十八ヶ所の第二十九番靈場としての国分寺の法灯を受け継ぎ、連日多くの参詣者が訪れている。

今回の調査は、国分寺による仁王門解体修理・庫裡増築・参道改修の諸工事と国分寺東側の市道国分3号線改良工事に起因するものであり、国分寺及び南国市建設課と数度にわたる協議を行い、文化庁記念物課史跡部門並びに高知県教育委員会文化振興課の指導を受けて南国市教育委員会が主体となり、当該工事計画地について史跡等現状変更及び土木工事に伴い事前の発掘調査を実施した。調査経過については、以下のとおりである。

### 仁王門解体修理に伴う調査

老朽化し、傾斜をもった状態であった仁王門の解体修理工事が昭和60年に計画され、国分寺から史跡等現状変更許可申請書が文化庁長官あてに提出された。調査は、上部建物の解体後に建物礎石下について地下遺構の有無に関して確認調査を行った。調査期間は昭和60年11月11日～11月15日までの間で、発掘調査面積は90m<sup>2</sup>である。調査地は国分寺境内への山門であり、地番は南国市国分546番地である。主要遺構等は検出されなかった。

### 庫裡増築に伴う調査

国分寺納経所東側に庫裡を増築することについて、昭和62年に史跡等現状変更許可申請書が提出された。土佐国分寺跡の南東部に位置し、地番は南国市国分546-1である。昭和62年8月20日～9月10日の間に、工事計画地100m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。寺院跡に関連する主要遺構等は検出されなかった。

### 参道改修工事に伴う調査

国分寺仁王門から金堂にかけての参詣路について昭和62年に、また中門西側の参詣路については昭和63年に改修工事にかかる史跡等現状変更許可申請書が提出された。調査は、改修計画範囲について昭和62年11月9日～11月30日の間に120m<sup>2</sup>（仁王門～金堂間）を、昭和63年9月6日～9月9日の間に30m<sup>2</sup>（中門西側）を対象に実施した。

### 市道改良工事に伴う調査

国分寺東側の市道国分3号線の改良工事に伴ない、昭和62年9月21日～9月30日の間に169m<sup>2</sup>を、またその北側延長部について昭和63年9月16日～10月31日の間に80m<sup>2</sup>の範囲を対象に調査を実施した。

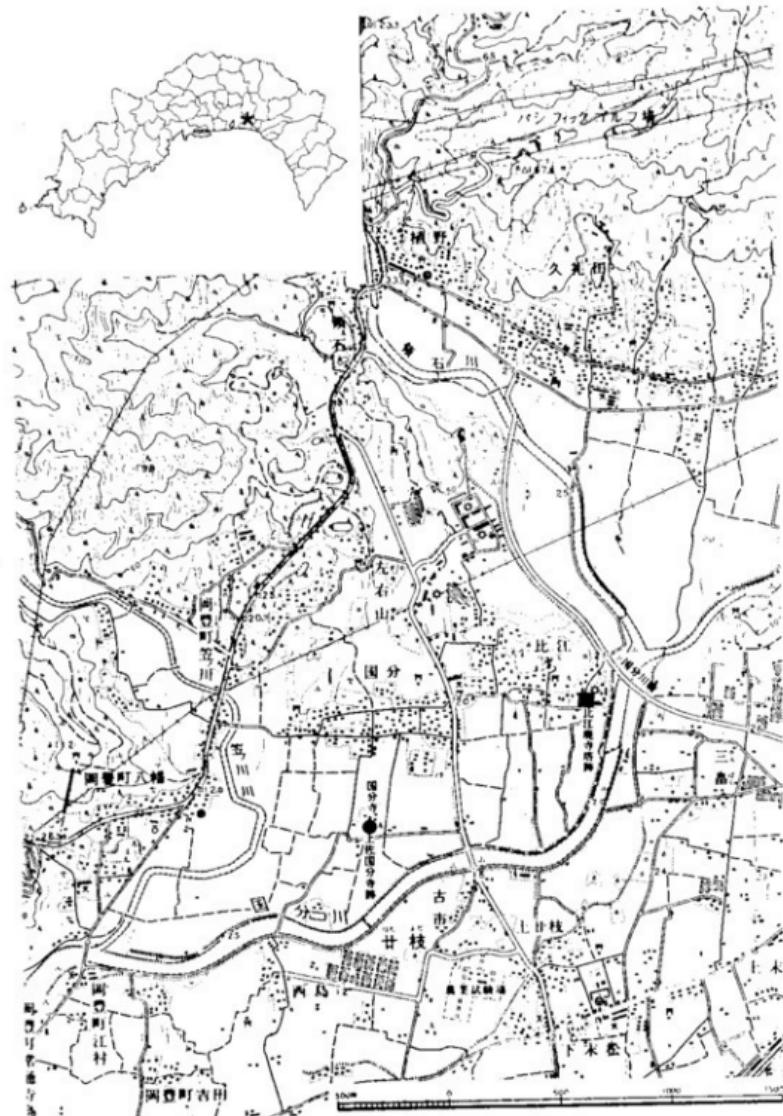


Fig. 1 土佐国分寺跡位置図

## 第Ⅱ章 土佐国分寺跡の沿革

土佐国分寺跡は、高知県中央部の南国市国分に所在する代表的な古代寺院跡である。寺域を取り巻く土塁の存在や古瓦の散布、寺域の規模、塔心礎、土地の地名、四国八十八ヶ所第二十九番霊場国分寺としての位置付けなどの諸事項から古くから国分僧寺跡とみなされ、大正11年10月12日に史跡土佐国分寺跡として国の史跡に指定されている。

国分寺金堂は、長宗我部元親の再建によるもので、明治37年8月29日に内務省より特別保護建造物として指定を受けた後、昭和25年8月29日に国の重要文化財に指定されている。また、平安時代前期作で西葉複弁蓮華文の鐘座を有する梵鐘（昭和31年6月28日・国の重要文化財）及び木像薬師如来立像二体（明治44年4月17日及び大正3年8月20日に国指定重要文化財）が伝わっている。さらに、境内の書院内庭園には、かつて境内内の秋葉神社の土台石として利用されていた土佐国分寺跡の塔心礎礎石が鏡石として置かれている。

このように、土佐国分寺跡の所在を示す物証が伝世等されてはいるが、一方で伽藍配置の内容をうかがうことのできる主要遺構等については、創建当初の遺構とされる土塁状の残存地形を除いて明確ではなく、発掘調査等による地下遺構の確認作業で検証する以外、手掛りがないのが実状であった。

寺院跡の発掘調査については、大正11年の史跡指定以降、鐘楼建立・書院改築（1977）庫裡増築（1978）・市道改良（1979）などの史跡等現状変更許可申請に伴う調査(1)が行われているだけで、伽藍配置等の内容を探る計画的な調査は実施されてはいなかった。また上記発掘調査においても、寺院跡存続期の土器類・瓦類等が出土し瓦溜等の断片的な遺構が検出されたものの、調査地点の大半が近現代の搅乱を受けており主要遺構の所在を確認するまでには至らなかった。このため、史跡指定地における現状変更等について検討する資料に乏しく、また老朽化した建物などの改築等を要するなどの現実的な問題点から、対応を講ずることが望まれていた。

南国市教育委員会では、かかる観点から文化庁記念物課並びに高知県教育委員会の指導と国分寺の協力を得て、主要遺構等の確認を行い今後の史跡保存の方策を検討するための基礎資料を得ることを目的とした学術調査を国庫補助事業として昭和62年度から実施しており、本年度についても第2次発掘調査が行われた。1次調査では、後述した参道1の調査で確認された建物跡の概形がN16°Eの主軸方位をもつ建物跡（S B 1）であることを、また2次調査では建物跡が3間×6間の東西棟であり創建期の建物跡であることなどが確認された。加えて、今回の2次調査では金堂北側の畠地から僧坊跡とみられる掘立柱建物群が検出されており、主要遺構の内容について始めて具体的な資料が得られることになった(2)。

土佐国分寺跡については、主要遺構の検出により具体像が明らかにされつつあり、今後の調査成果によって、これまでの推定諸説に検証と再考をうながす機会になるものと考えられる。

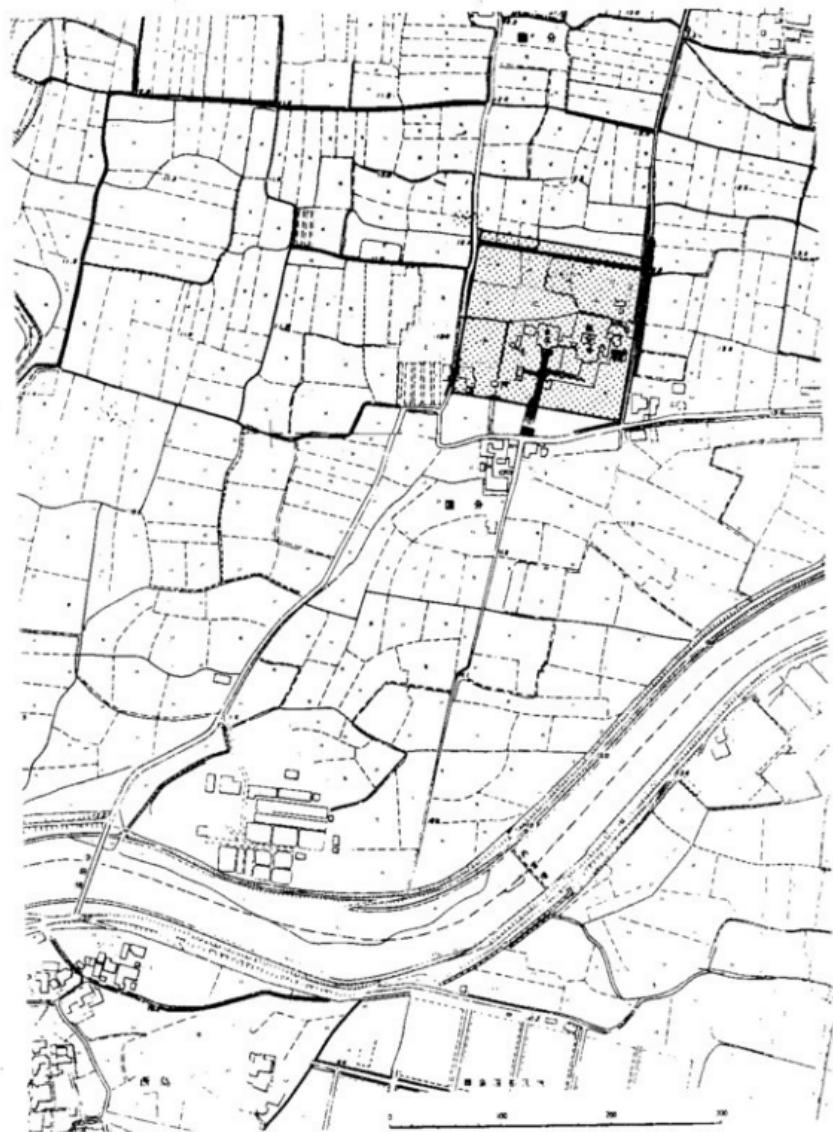


Fig. 2 調査地区位置図

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1. 仁王門解体修理に伴う調査

#### (1) 調査に至る経過

土佐国分寺は、現在も真言宗智山派、四国八十八ヶ所の第二十九番靈場として、法灯が展開されている。現在の仁王門は、国分寺の土壘よりやや西に張り出した位置に所在している。

宗教法人国分寺では、昭和60年度（1985）中に仁王門の解体修理工事を行うこととなった。かかる状況から、南国市教育委員会では、文化庁、高知県教育委員会、宗教法人土佐国分寺と協議を重ね、史跡等現状変更に伴う発掘調査を高知県教育委員会の指導を得て実施した。

調査区地番は国分546番地、調査対象面積は90m<sup>2</sup>である。調査期間は、昭和60年1月11日～1月15日までである。

#### (2) 基本層序

仁王門床コンクリート下部の土層堆積は、次のとおりである。1層・黒褐色粘質土、2層・灰褐色粘質土、3層・茶色粘質土、4層・黒褐色粘性土、9層・黒茶褐色砂礫土である。礎石が構築された土層は4層で、この4層は近世の遺物を含む層である。9層は地山整地層で、上面は平坦に整地されており、凹地には8層を入れ踏み固めている。当地区の8層からは、遺物は確認されていない。

#### (3) 検出遺構

検出された遺構は、礎石建物跡（仁王門）1、礎石建物下部にて検出された溝状遺構1、ピット2基である。以下当時の調査担当者の所見により記述する。

##### S B 1

礎石建物跡は、コンクリート床除去後、下部において確認されたものである。礎石建物跡は、基壇状に構築された石の上に建つものである。柱間は、3間×3間である。いわゆる3間一戸の門である。正面礎石中央前面には、階段状の石組がみられる。この礎石建物跡は、昭和2年に整地された層の上に修理構築されたものである。

##### S D 1

調査区東部にて、検出された溝状遺構である。幅0.9m、確認された長さ1.6m、深さ0.8mである。覆土は、6層の砂礫層が堆積しており、一部8層の粘土層が流れ込んでいる。

検出された遺物は、土師質土器、青磁細片が少量出土している。かかる状況からS D 1の構築時期は、16世紀頃と想定される。

##### ピット1・2

調査区西部の9層上面にて検出された遺構である。径は、ピット1・2共に30cm前後を測り、深さ40cmを測る。覆土は、茶褐色土で、ピット2より土師質土器の細片が検出され

ている。なお、ピット2には、検出面に30cmの石が置かれていた。各遺構の時期は、16世紀の所産と想定される。

#### 9層整地層

9層は、遺物を伴っていないため、その所産時期については明確に判断はできないものの、SD1に切られていることより考えれば、16世紀以前に構築されたのは確実であろう。

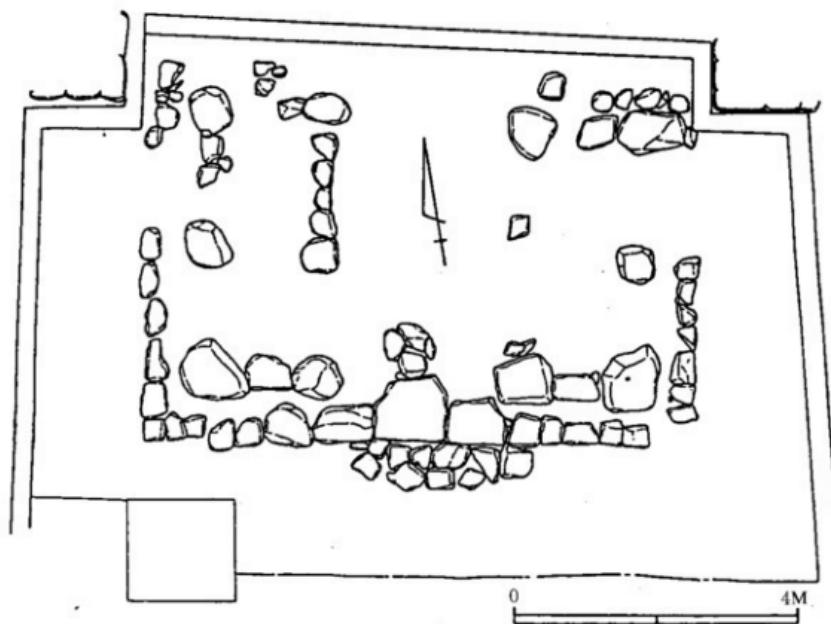


Fig.3 仁王門地区平面図

#### (4) 出土遺物

仁王門の整地層からは、鎧瓦片1点、女・男瓦片が多数検出されている。これらの瓦を凸面の叩きにより分類して述べることにする。検出された瓦は、ほとんどが二次焼成を受けたもので遺存状況は不良である。

##### 鎧瓦

1は、二次焼成を受けた複弁蓮華文鎧瓦である。

##### 女瓦

2は、女瓦と思われるもので凹面には、接合痕が観察できる。凸面は、縄目が一部観察でき、円形の文様が認められる。

3は、凹面には布目が観察できる。凸面に櫛状の整形を施すものである。やや薄手の瓦であり模骨痕が観察できる。

4は、凹面に細かい布目が観察できる。凸面には、 $0.4 \times 0.7\text{ cm}$ の正格子の叩きが認められる。

5は、凹面に細かい布目が認められるものである。凸面は、 $0.4 \times 0.4\text{ cm}$ の正格子が認められるが、ややつぶれている。

6は、一部布目が観察できる。凸面は、斜格子の叩きを施すもので $1.5 \times 1\text{ cm}$ のやや大型の叩きである。

仁王門地区にて観察された瓦は、国分僧寺関係のものと、先に記した仁王門に関係するものが確認された。調査区の瓦類は二次焼成を受けたものがほとんどで細片が多い。

#### (5) 仁王門地区小結

仁王門では、礎石建物跡、溝状遺構、ピットが検出されたが、土佐国分僧寺跡に関する確実な遺構は検出されなかった。9層については16世紀以前の構築であることが想定できる。しかし、その性格については不明であるが、整地面が調査区以外に広がっていることから国分寺に関係する遺構であると考えられる。

礎石建物跡は、3間一戸の仁王門の礎石と考えられる。調査者の所見によれば、4層は近世の遺物包含層とされている。

近世における土佐藩は、周知のように山内家の統治するところとなった。歴代藩主のうち、二代藩主山内忠義（1592～1664）は、特に寺院の復興に力を注いだとされており、国分寺もその例外ではなかった。江戸時代の国分寺の復興については、国分寺住職林廣裕氏が棟札、造像銘などから法灯の展開などについて述べられている（1）。そこで、かかる資料から仁王門礎石建物跡について検討を加えてみたい。

仁王門の復興は、仁王像胎内銘に「明暦元年十一月吉日 国分寺仁王貳師 仏師□□□七十歳」「此仁王□□京大仏師第□々 雲七十歳之作也」とある。また、元禄2年（1689）版の寂本の『四国偏礼靈場記』には梵鐘のかかった仁王門が描かれている。かかる状況より仁王門は明暦元年（1655）に再興されたことが想定できる。さらに、仁王像の他の銘文には天明

6年（1786）3月、天保8年（1837）正月、慶応3年（1867）初秋、昭和3年（1928）12月などに修理されたことが記されている。林氏も指摘されているように、仁王門の修理も同時に行われた可能性もある。今回検出された礎石建物跡は、かかる状況より明暦年間の礎石跡と推定できるものである。さらに、修復された可能性があるとすれば、この礎石建物跡はこれ以降の修復に伴う所産であると考えられる。

註

1) 林廣裕「江戸時代の国分寺の復興について」『南国史談』第1号 1986 南国史談会

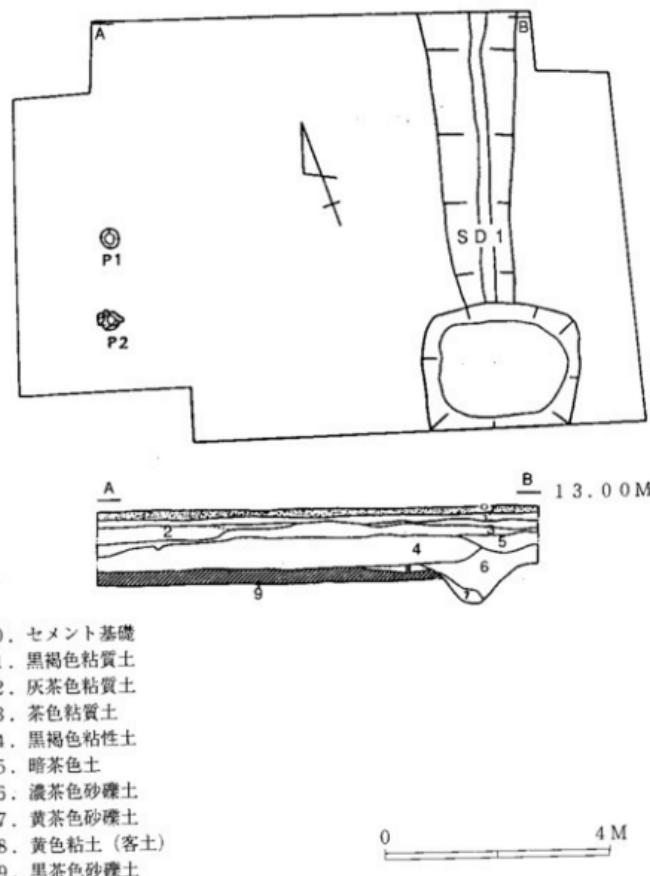


Fig.4 仁王門地区平面図

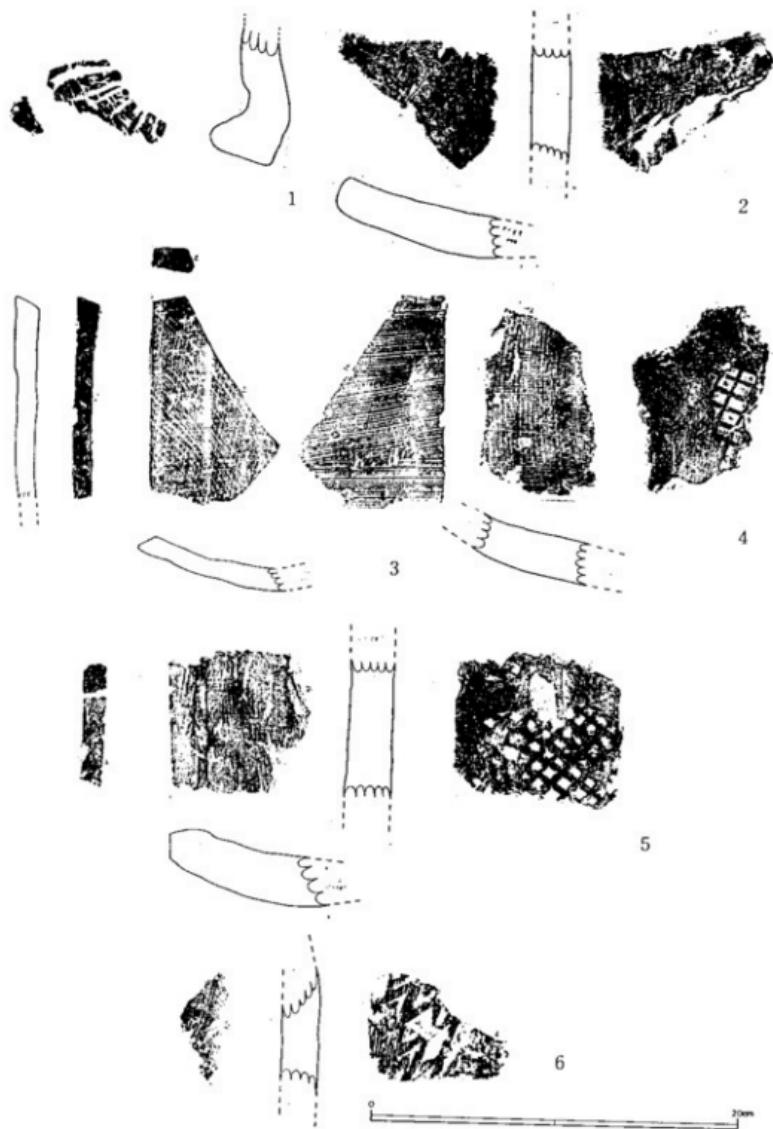


Fig. 5 仁王門出土瓦

## 2. 庫裡増築に伴う調査

### (1) 調査に至る経過

昭和62年の早春、国分寺境内の納経所東側空き地に庫裡を増築することが計画され、国分寺から昭和62年4月14日付けで史跡等現状変更許可申請書が提出された。当該届出等について昭和62年6月24日付け・委保第4の414号で文化庁から、事前の発掘調査による地下遺構の確認等を要する旨の通知があった。このため南国市教育委員会では高知県教育委員会の協力を得て、申請地100m<sup>2</sup>の全面発掘調査を昭和62年8月20日～9月10日の間に実施した。

調査地は推定寺域の北東区にあたり、1977・1978年における発掘調査地(3)の東側隣接地に該当する。

### (2) 基本層序

調査区の層序は次のとおりである。1層・表土で茶褐色粘礫土、2層・茶灰色粘質土(旧耕作土)、3層・褐色粘礫土、4層・灰褐色粘質土、5層・黒褐色粘質土、6層・黄褐色粘質土(地山)、7層・淡茶色粘礫土(地山)。1層から3層までは近・現代の掘削行為等による擾乱を強く受けている。4層及び5層中から古墳時代～奈良・平安時代、室町時代に属する土器片が出土し、6層上面で遺構が検出された。発掘区の土層堆積厚は、平均30～40cmと浅く、遺物包含層を層位的に区分することはできなかった。

### (3) 検出遺構と出土遺物

#### 遺構

竪穴住居跡1棟、溝4条、土坑4基、柱穴及びピット等が検出された。

#### S D 1

調査区東部で検出した南西方向の溝跡で、幅0.4～0.5m深さ10～30cmを測る。埋土は4層・灰褐色粘質土で青磁・白磁・土師質土器の細片が出土した。15～16世紀頃の中世の溝跡であると推測される。

#### S D 2

調査区北東部で検出した東西方向の溝跡で、幅0.14m深さ10～20cmを測る。埋土は2層・茶灰色粘質土である。

#### S D 3

幅0.2m深さ15～20cmを測る東西方向の溝跡で、埋土は2層である。

#### S D 4

幅0.25m深さ5～10cmを測る南北方向の溝跡で、埋土は2層である。

#### S T 1

調査区西部で検出した隅丸方形の竪穴住居跡である(4.1×3.4m以上)。埋土は5層・黒褐色粘質土でヒビノキ「式土器」が出土し、弥生時代末～古墳時代初頭に位置付けられる。壁高は10～15cmを測る。南西部の大半を近世の大型土坑SK2により破壊されている。

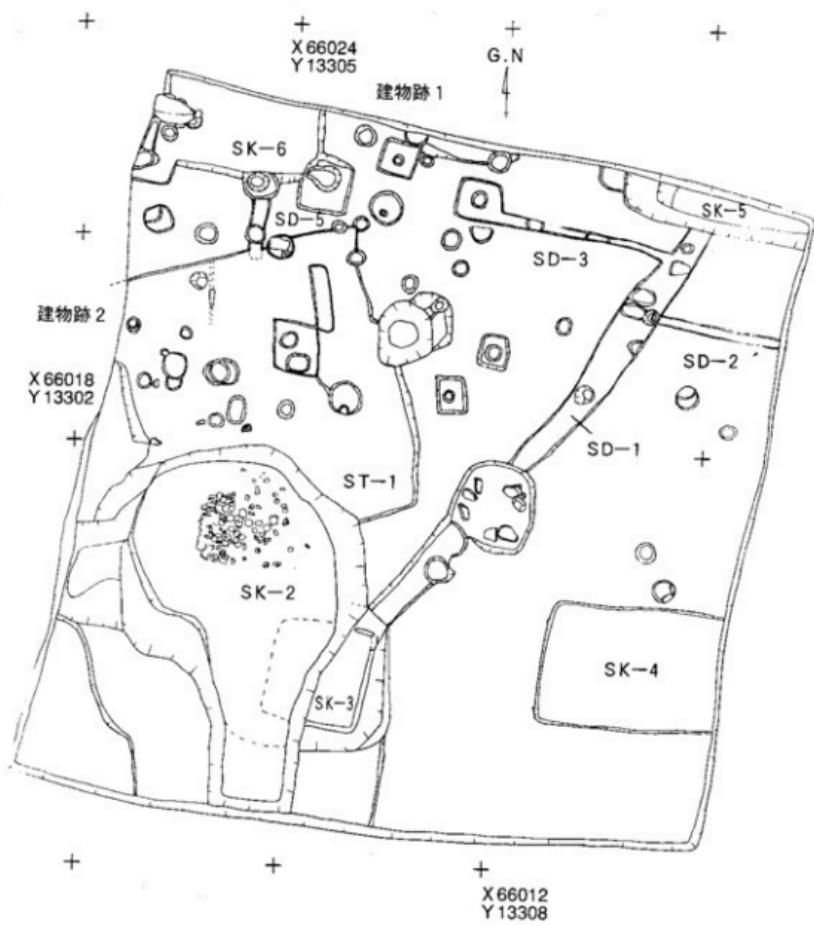


Fig. 6 庫裡調査区平面図

### S K 1

S T 1 の東壁沿いに検出した土坑である。2 時期にわたる切り合いが認められる。径 0.8 ~ 0.9 m 深さ 60 cm を測り、埋土は 5 層・黒褐色粘質土でヒビノキ「式に属する弥生土器細片が出土した。S T 1 に属する遺構とみられる。性格については判然とはしないが、S T 1 の東壁ラインを切っており、屋内外区の貯蔵穴としての機能を有する遺構である可能性を有する。

### S K 2

調査区南西部で検出した近世の大型土坑である。径 3.3 ~ 3.8 m 深さ 80 cm を測る。土坑底面で 0.7 × 1.0 m を測る方形状の範囲から、江戸後半～幕末にかけての灯明皿・台付灯明皿等が一括出土した（総数 150 点）。灯明皿類のなかには墨書き土器が含まれる（総数 15 点）。

木製品等は遺存してはいなかったが、重ね置きが観察される遺物の出土状況などからみて、土器類は木箱等に収納されていた可能性がもたれる。また、土坑内には瓦類等の他の遺物は混入投棄されていないことから、S K 2 は不用品の廃棄に供する土坑ではなく、祭事に使用した土器類を埋めた埋納土坑として位置付けられる。

### S K 3

S K 2 南東部で検出された方形の土坑である。土坑底部に漆喰壁が残存している。

### S K 4

調査区南東部で検出された深さ 10 ~ 15 cm の浅い落ち込みである。埋土は、2 層・茶灰色粘質土である。

### S K 5

調査区北東部で検出された深さ 20 ~ 30 cm の落ち込みで、埋土は 2 層である。近・現代の瓦片等が出土した。

### S K 6

調査区北西端で検出された深さ 25 ~ 30 cm の落ち込みである。建物跡 1 の柱穴掘形を切っている。須恵器細片（奈良末～平安時代）が出土しているが、遺構の内容は不明である。

### 建物跡 1

柱穴跡を確認したのみで、規模及び内容等は不明である。一辺約 70 cm を測る方形の掘形をもち、柱間は約 2.7 m を測る。

### 建物跡 2

1 間 × 1 間以上の小規模な建物跡である。柱間距離は桁行で 1.8 m、梁間で 2.7 m を測る。建物跡 1 と重複関係がみられる。

なお、建物跡 1 及び 2 については、主要遺構ではないものの土佐国分寺跡存続期の遺構（付属施設の一部）である可能性が想定されるため、調査後に砂で被覆し埋め戻しを行った。また、建物基礎工事等の掘削行為を要する範囲から除外することとした。

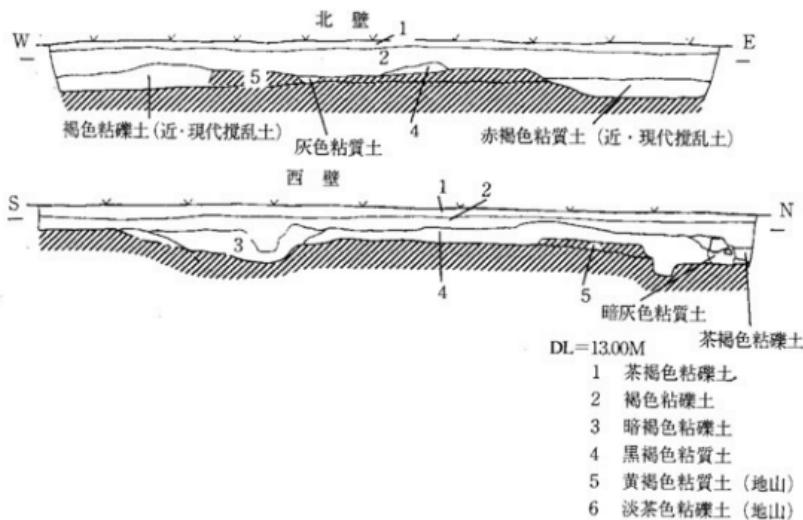


Fig. 7 庫裡調査区土層断面図

0 2M

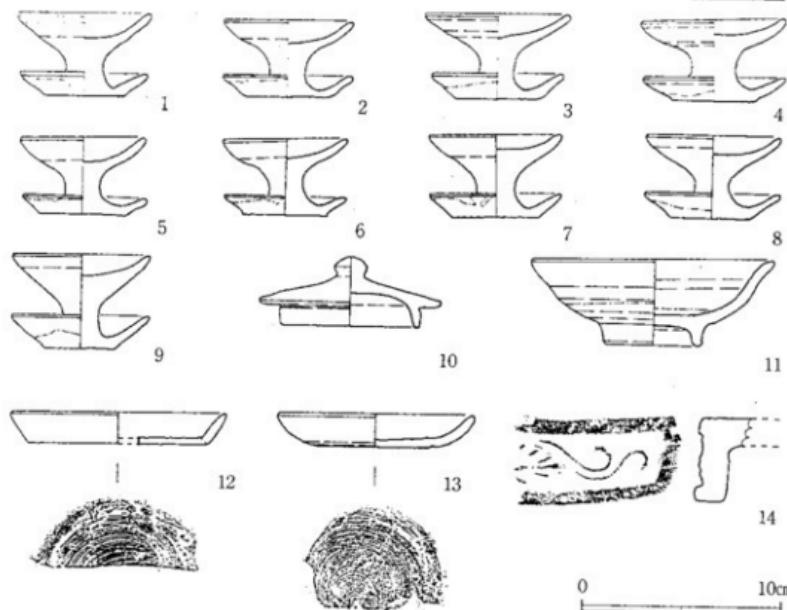


Fig. 8 庫裡調査区SK2出土遺物 1

## 遺物

弥生時代末～古墳時代、奈良末～平安時代、室町時代、江戸時代～明治・大正時代の遺物が出土した。出土点数は細片を含めて約400点余であるが、近世の大型土坑SK2からの出土土器類を除いて、図化できるものは少ない。遺物の特徴から種別すれば以下のとおりである。

### ○弥生末～古墳時代初頭

ヒビノキⅡ式土器 壺・甌

### ○奈良末～平安時代

須恵器 杯・碗・甌、土師器 杯・碗

瓦類 丸瓦・平瓦

### ○室町時代

青磁碗、土師質土器 杯・皿・鍋

### ○江戸末～明治時代

土師質土器 杯・皿、陶磁器 壺・碗・灯明皿・台付灯明皿

瓦類 巴文軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦、錢貨 寛永通宝

### ○明治～大正時代

陶磁器 碗・壺・皿、瓦類 軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦

出土遺物のなかで、SK2の土器類に関しては次のとおり観察される。

#### 大型土坑出土の土器について

今回検出された江戸時代後期の土坑・SK2から出土した土器類は、灯明皿が主体をなしている。これらの土器には一部墨書の認められるものがあり、その点数は15点を数える。墨書土器は、皿の灯明皿のみである。墨書きられる灯明皿は、図示したごとく皿のみのものと、受け皿を置くものとに分類される。

墨書きは皿底部に墨書きするものが大半であり、皿の側部に墨書きするものもある。墨書きは遺存状態の良好なものもあるが、判読できないものもある。

墨書きについて判読できたものは、「厄」、「ハリマ」、「ヤライマハ」、「厄」、「一七」、「一四」が判読できるものがある。

厄年については、男は25、42、女は19、33などとするところが多い。女の厄年は3、7、9のつく年などと地域によって偏るようである。ここで皿に墨書きされた年をみると、14、17の年がみられる。14は13の後厄として理解でき、17は厄そのものと考えられる。

「ヤライマハ」は名とも考えられるが、ここでは一応、その性格については不明としておくことにする。

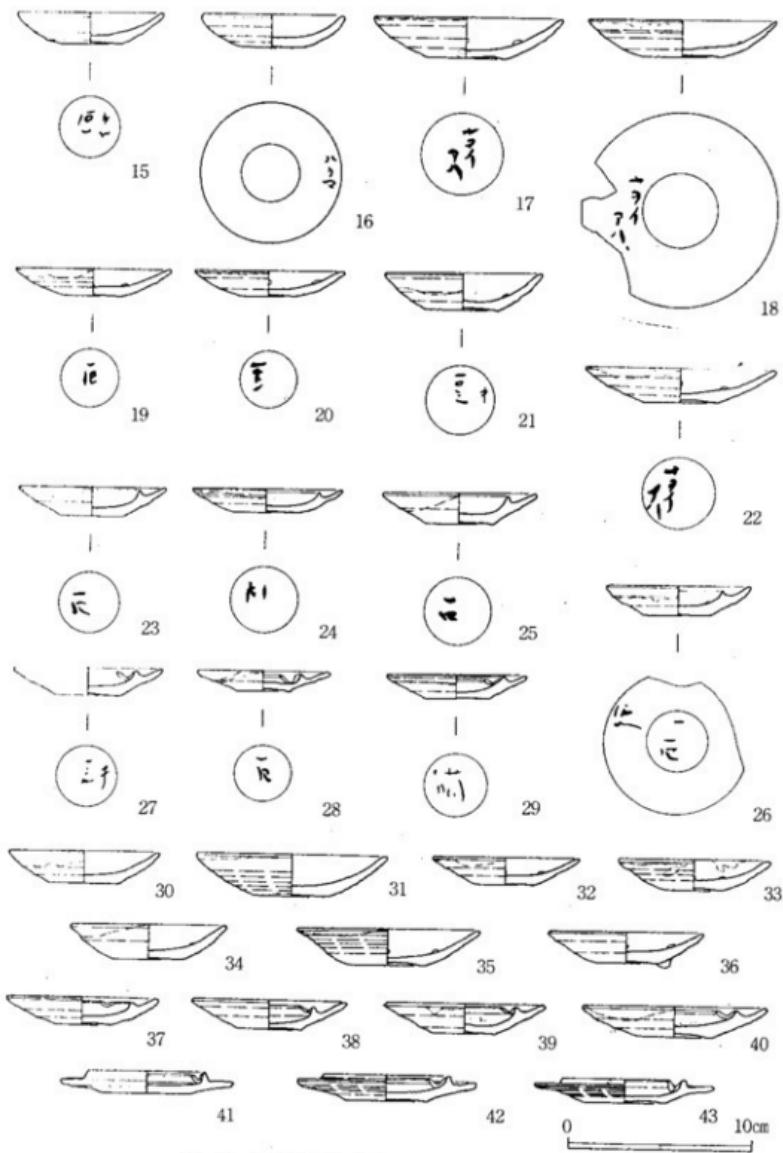


Fig. 9 庫裡調查区 SK2 出土遺物 2

### 3. 参道改修工事に伴う調査

昭和62・63年に、国分寺境内の参道部について改修工事が計画され、当該史跡等現状変更許可申請に伴う発掘調査が実施された。工事の対象となった参道は、昭和初期に布敷されたセメント道（幅2.6m厚さ30cm）で、長年にわたる歩行等によりひび割れ、部分的な陥没がみられていた。工事計画では、このセメント道を除去し石敷化とするもので、昭和62年以降に境内の参道部について継続的な工事を進めることが計画されていた。昭和62年の申請区域は仁王門から金堂にかけての範囲が、昭和63年については中門西側の参道部が対象となった。調査地の地番は南国市国分543である。

調査内容については、便宜上、昭和62年調査地を参道1に、昭和63年調査地を参道2として記述することにする。

#### （1）参道1

仁王門から金堂にかけての南北方向の参道部約120m<sup>2</sup>について、昭和62年11月9日～11月30日の間に調査を実施した。

除去した参道（セメント道）の下部については、次の堆積土が認められた。1層・褐灰色粘質土で表土層、2層・褐色粘質土、3層・暗褐色粘質土、4層・黒褐色粘質土、5層・黄茶色粘質土、6層・茶褐色粘礫層で、5・6層は地山である。土層の断面観察からは、調査区の北端から南端にかけて、1～4層が整然と層序堆積している状態ではなく、2層または3層下が地山となっている範囲が多くみられ、4層の堆積は部分的である。また、6層の堆積は現鐘楼の西側付近から仁王門にかけての調査区南側範囲で認められた。表土から地山までの平均厚は約30～40cmで、堆積土は比較的浅い。4層からは弥生土器片・須恵器片・土師器片・瓦片等が出土し、2層からは近・現代の陶磁器片、瓦片が出土した。

中門西側から金堂周辺にかけての調査範囲では、近現代の掘削によるとみられる大型土坑が集中して検出された他は、寺院跡に関連する遺構等は検出されなかった。鐘楼西側の調査範囲において、後述する建物跡SB1の柱穴の一部である北側3・南側3の計6の方形掘形が南北に並列した状況で検出され、寺院跡関連の地下遺構の存在が初めて確認された。また、建物跡の南側では円形の柱穴跡・ピットが検出された。

なお、SB1の方形掘形が検出されたことにより、昭和62年12月21日～12月27日の間に鐘楼北側部の調査が、また昭和63年9月16日～9月25日に鐘楼西側部の調査が学術調査として実施され、SB1は梁間5.8m桁行11.3mを測る三間×六間の東西棟の建物跡であることが確認された(4)。

#### （2）参道2

中門西側の東西方向の参道部約30m<sup>2</sup>について、昭和63年9月6日～9月9日の間に調査を実施した。調査区の堆積土は、1層・茶黒褐色粘質土、2層・黄茶色土混入土、3層黒褐色土、4層・暗褐色土、5層・黄茶色土（地山）などがみられるが、全体的に近現代の搅乱の度合いが強く、江戸時代後半～明治時代前半の採土痕や廃棄土坑が認められた。なお、堆積土中

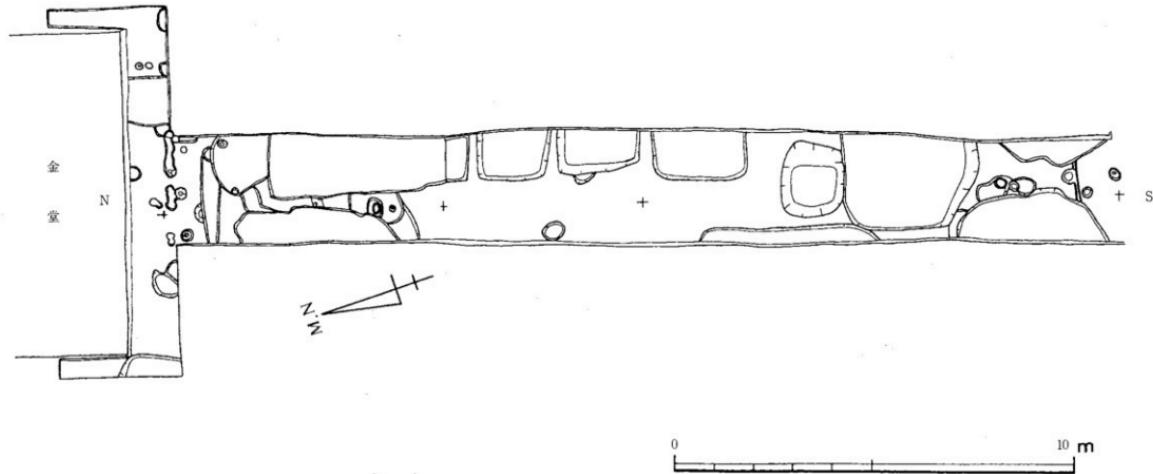


Fig.10 参道1 調査区平面図（金堂前参道）

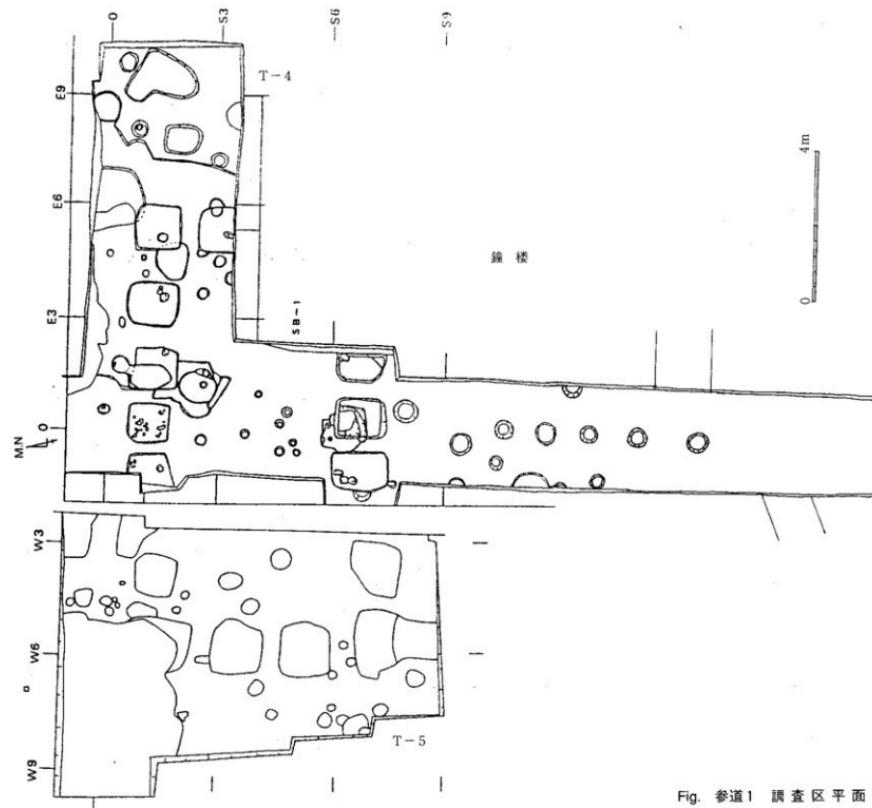


Fig. 参道1 調査区平面図（鐘楼周辺・SB 1）

から、凸面にから、凸面に絵画風の線刻を施した平瓦片・凸面に人面を線刻した瓦片が出土している。これらの線刻瓦は部分破片であり、表現の意図については明確ではない。また、寺院跡存続期の遺構内からの出土遺物ではないために遺物の所属時期を特定することはできないが、他の土佐国分寺跡出土瓦片と同様な成形・胎土・焼成・布目痕の特徴をもつことから、寺院跡関連遺物である可能性を有している。

調査した参道部のうち、鐘楼西北部で開山堂東側の参道については、S B 1 西側（鐘楼西側）の調査と前後して実施されたが、S B 1 に関連する遺構等は検出されず、近現代の大型搅乱土坑が1基確認されたのみであった。開山堂に近接する範囲では、近世の参道面と考えられる硬質の堆積土（3層・暗黒茶褐色土）の形成が認められ、3層下が4層・黄褐色疊層（地山）となっていた。堆積土の様相から、中・近世の国分寺造営に際して古代の遺構形成面がかなり削平されていたことがうかがわれる。

### （3）検出遺構と出土遺物

#### 遺構

建物跡1棟・柱穴・ピット・近現代の搅乱土坑などが検出された。

#### S B 1

鐘楼西側の参道下で、南北に並列した方形掘形6が検出され、東西棟の建物跡が存在していたことが確認された。掘形の規模は一辺1.2~1.4mと大型で、寺院跡関連の主要遺構であると考えられたことから、建物跡の範囲及び性格等を探るための確認調査が昭和62・63年度に実施され、該当参道部の東側と西側について調査区域が拡幅された。その結果、三間×六間の東西棟で梁行1.3m梁間5.8mを測る建物跡であることが判明し、S B 1 と呼称されることになった。建物跡の掘形中心間の距離は、北東隅及び東縁部、西縁部で1.8m前後を測り、北縁及び南縁部では1.5m前後である。全体の平面プランとしては、中央部の柱心間が1.4m~1.5mと幅狭になっており、東室と西室に屋内区分されそうな特異な構造をもつ。また、掘形内では柱痕跡は検出されず版築状の堆積土が観察されることや、一部の掘形上部に根石状の河原石が遺存するなど、柱部に方形の掘込地業を施した礎石建物跡として復元される可能性を有している。建物主軸方位は磁北に対して東側に16°偏東し、推定寺域の基本ラインである東側土塀ラインと一致する。また、東西500尺の推定寺域のなかでは、中軸線上に位置している。従来の推定伽藍配置においては中門の推定地であるが、検出遺構からは門跡の痕跡は確認されていない。確認調査において、北東隅の掘形底から須恵器質の平瓦片が出土しており、創建期に近接する時期の建物跡であることが判明しているが、土佐国分寺跡造営に先行する建物跡群の一部であることも考慮される。白鳳期の塔心礎に類似する書院内庭園の有溝の塔心礎の存在と併せれば、先行寺院や堂舎等の施設の所在について検討課題が残される。

#### 柱穴・ピット

S B 1 の南側から、円形の柱穴・ピットが検出されている。このなかで径0.48~0.50m・柱穴間1.2m前後の柱穴列は、小規模な建物跡の側邊とみられるが主軸方位はN21°E

でSB1の方位とは異なり、やや東偏している。柱穴内からの出土遺物はなく、所属時期は明確ではない。

なお、前記確認調査（昭和62年度）において、SB1の覆土中から平安時代中葉～後半に属する土師器が出土し（SB1遺構検出面直上）、また、SB1北側から該当期のピット1が検出されて壺・椀類が集中出土している。

#### その他の遺構

参道1・2の調査区からは、近現代の擾乱土坑が検出されている。この土坑からは、幕末から明治・大正期にかけての陶磁器類・瓦類・漆喰片・ガラス片などが出土し、主として不燃物類が投棄されていた。また、土坑のなかで参道1から検出された大型土坑については、出土遺物は皆無で、地山である黄褐色粘質土が掘り込まれたような状況で南北方向に並んで検出されている。他の土坑と異なり、この大型土坑に関しては不用物の廃棄用のための素穴ではなく、採土を目的とした痕跡であると考えられる。おそらくは、地山層を転用土として活用するために掘削されたものと推測される。

#### 遺物

弥生後期末土器片・土師器片・須恵器片・瓦片、近現代の陶磁器片・瓦類・漆喰片・ガラス片などが出土しているが、寺院跡存続期の関連遺物の出土は少量であった。

注目される遺物としては、参道2調査区堆積土中から出土の線刻瓦片2点である。いずれも凹面に布目痕をもつ平瓦の部分破片で、凸面に線刻絵画が施されている。（ ）の瓦片は須恵器質の胎土をもち、凸面の線刻は焼成前に刻されたことが観察される。船の輪先状を呈する輪郭線の外側に総数10本を数える継ぎの細かい刻線が認められる。この線刻絵画の表現主体については、「国分川を渡る舟を題材にした線刻絵画」との指摘がある（5）。（ ）の瓦片については、胎土が軟質で凸面の線刻が焼成前であるのか、焼成後の2次刻線であるのかは判然としない。線刻絵画の表現主体は人物像で左横側面からの描写である。頭上部と首部以下の構成は破片のため不明であるが、U字型の顔の輪郭線内に、眉・鼻・目・口が認められる。目は横位の刺突沈線で直線的に、口はやや橢円状に、鼻はし字型に表現され、印象として男性的である。下部に首の輪郭線としてハ字型の刻線が観察される。目から上部については点状をした眉の表現がみられ、顔の輪郭についてはO字型ではなくU字型であることから頭部にかぶりものが表現されていたものとみられる。

この線刻瓦片については、土佐国分寺跡出土瓦と焼成・胎土・色調が類似し、遺構内出土遺物ではないものの、寺院存続期の遺物であると推察される。なお、（ ）については後世の贋作であることも考慮されるが、作風等からみて寺院跡関連遺物として扱っておきたい。文字瓦類が未発見である土佐国分寺跡出土瓦類のなかで、絵画線刻を施した瓦片出土の意義は深く、今後同様な瓦類の検出があることが期待される。なお、線刻瓦の存在の確認は、現地調査においてではなく、その後の出土遺物類の整理作業中に判明したことを申し添えておきたい。

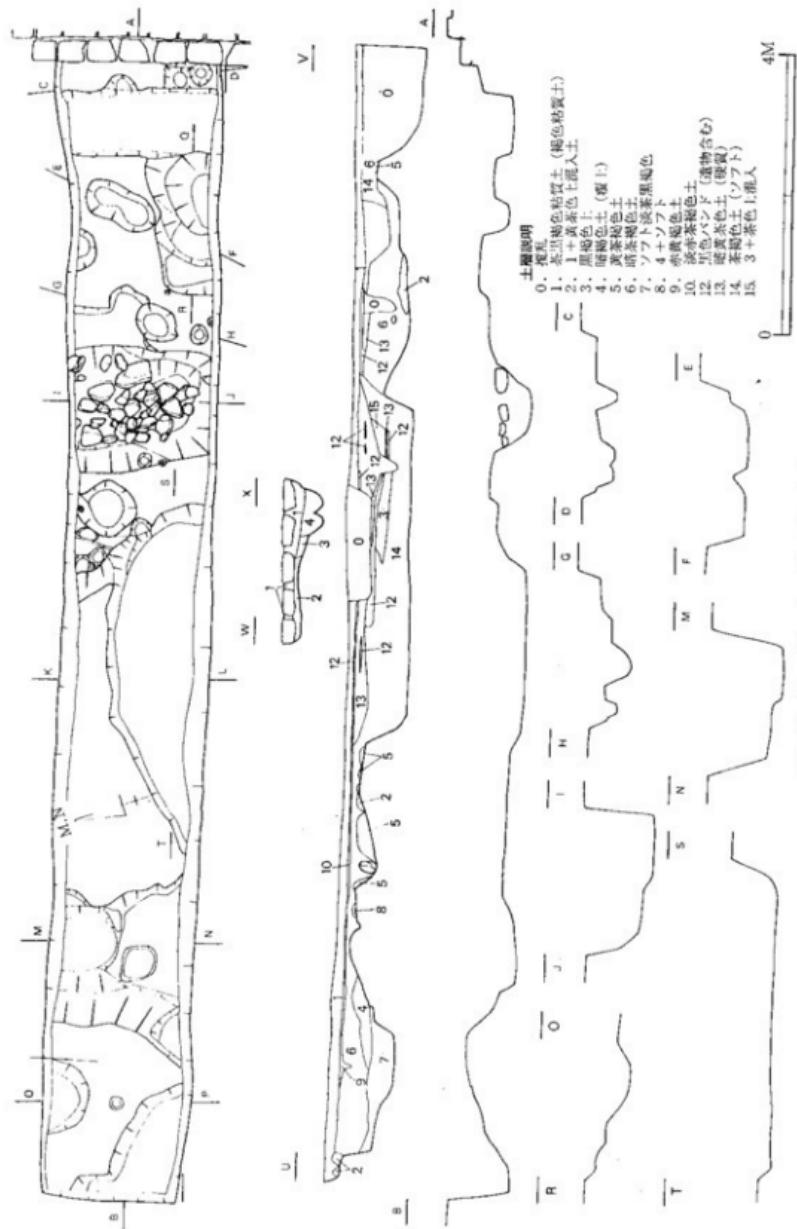


Fig.12 参道 2 調査区

Fig.13 参道出土瓦 1

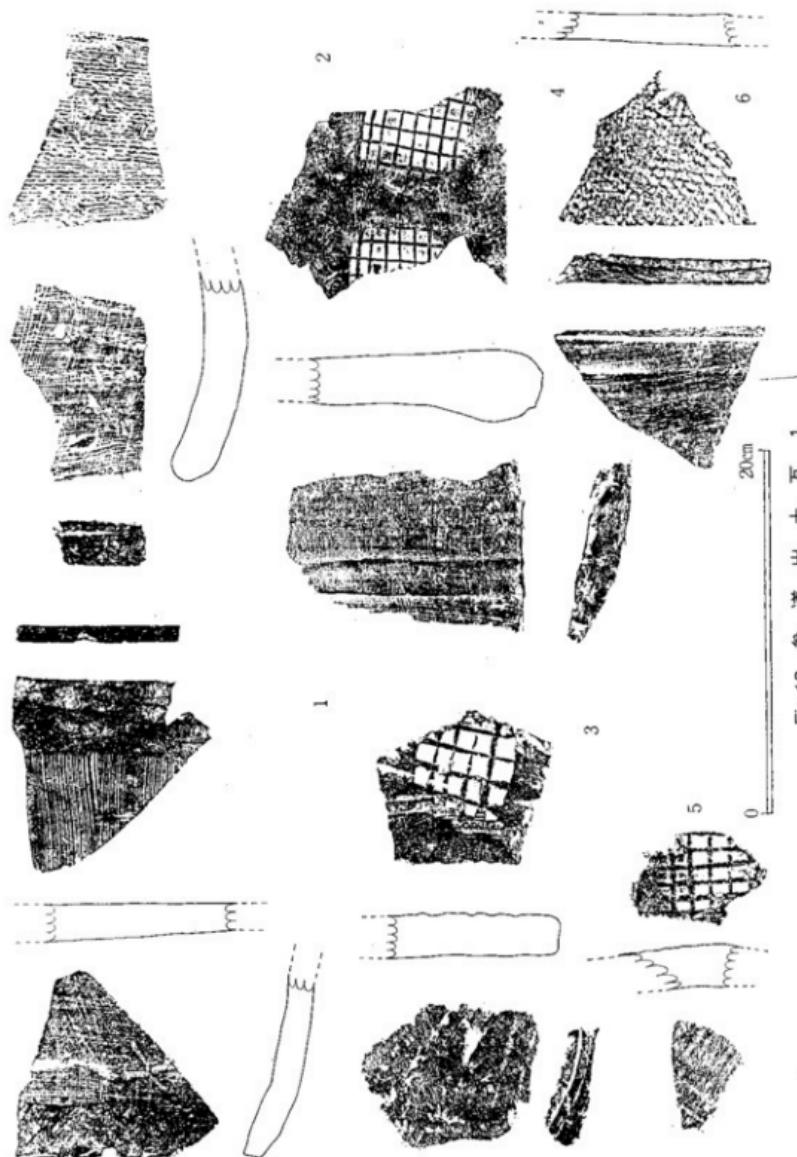


Fig.14 参道出土瓦 2

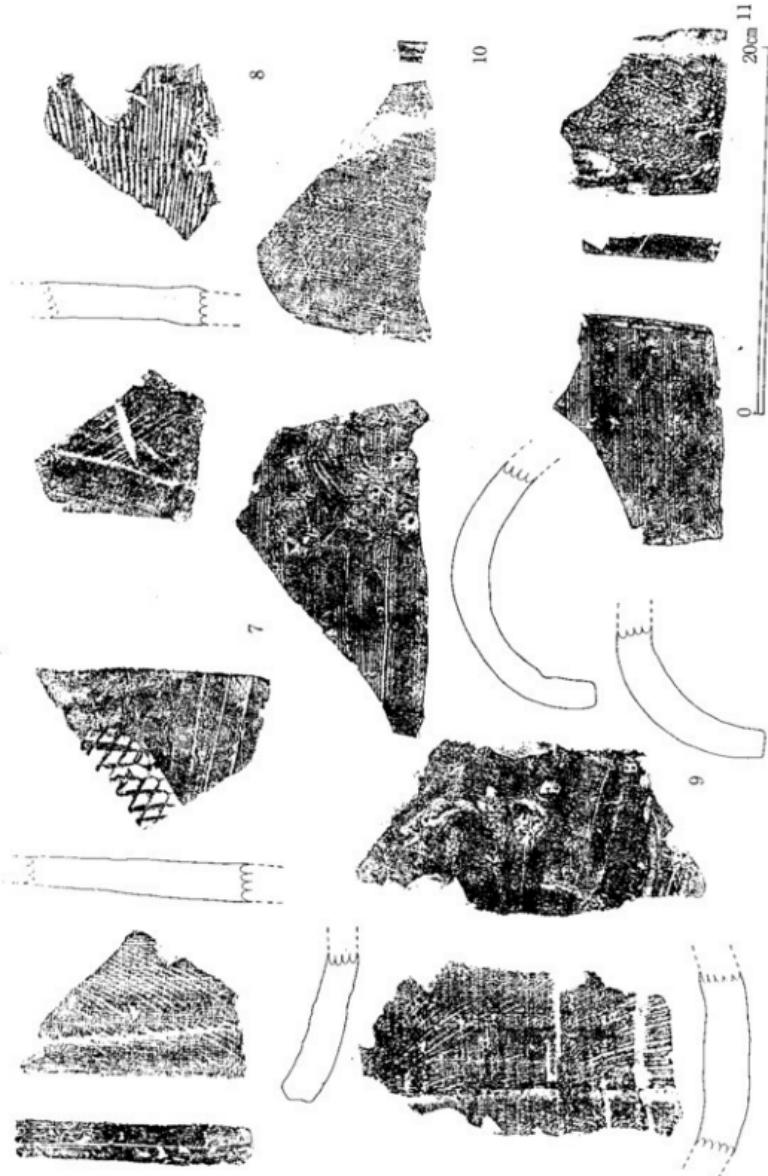
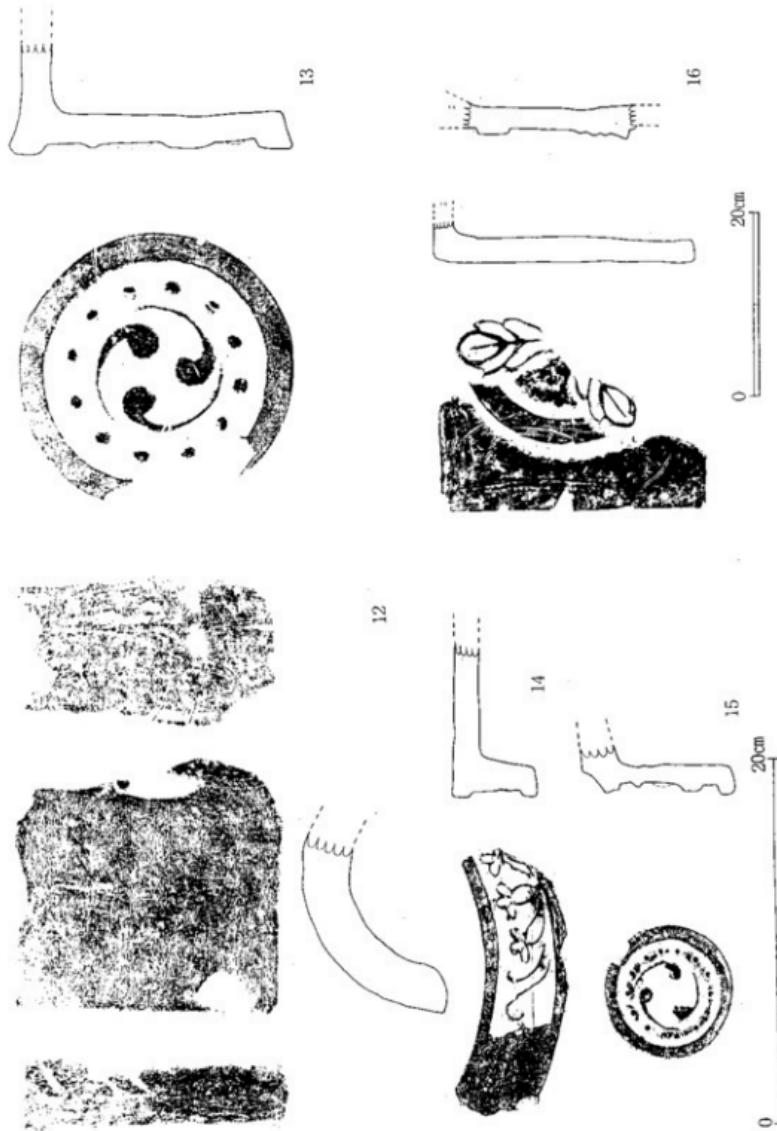


Fig.15 参道出土瓦 3



#### 4. 市道改良工事に伴う調査

市道国分3号線道路改良工事に伴い、国分寺東側の南北道路について、工事対象範囲である道路東側拡幅部分を昭和62年9月21日～9月30日（国分寺東通用口付近から東側土塁北縁付近まで）、昭和63年9月16日～10月31日（前年度の北側延長区間）の間に調査した。該当地は史跡指定区域外ではあるものの、土佐国分寺跡の遺跡範囲内として取り扱った。

##### （1）調査の方法

昭和62年度は、市道東側の拡幅部について計5ヶ所の調査区を設定し（南側からTR1→5・1691・南国市国分字井ノ上）、昭和63年度については拡幅部の全面発掘を実施した（TR6・801・南国市国分字古屋敷、字森田）。調査区はいずれもトレンチ調査である。

##### （2）基本層序

TR1～4については、第1層表土で茶褐色粘質土、第2層灰茶色粘質土で耕作土、第3層茶褐色粘疊土、第4層黒褐色粘疊土、第5層茶褐色疊土で地山、の堆積が認められ地山の基盤土は疊層である。TR5については、調査区南側で第4層下に第5層褐色粘質土が、また北側では第4層下に第6層黄褐色粘質土が堆積し地山となっている。

TR6では、第4層の堆積度合いがTR1～5に比べてやや厚く、第5層茶褐色粘質土、第6層黄褐色粘質土で地山となっていた。地山の検出高はTR5・6がTR1～4に比較してやや小高くなっている。

##### （3）検出遺構と出土遺物

TR1から3までは遺構等は検出されず、TR4の北側で第4層の浅い落ち込みとピット1が確認された程度である。TR5では第5層面で第4層を埋土とする溝1条・南北方向に連なる浅い落ち込みが検出され、室町時代後半～戦国時代の土器類（青磁片等）が出土した。TR1～5については、調査区の西側に存在する土壘状地形に関連した遺構は何等検出されなかった。なお、昭和62年度の確認調査でTR4の東側に設定されたT-2調査区の東西トレンチでは、寺城東限に関連する遺構等は検出されず、室町時代の井戸跡1基が検出されている。

TR6では、弥生末～古代・中世の柱穴・ピット・土坑等が検出されており、遺構密度も高い。古代のなかで平安時代後半～末の土師器碗・皿片・縁軸・中世の青磁片・土師器類は主に第4層中から出土し、弥生末土器片・古墳時代後期の須恵器片（坏身・高杯脚部・7c前半頃）、奈良時代～平安前半の土師器類（碗・皿片）、須恵器片（碗底部・碗口縁部片）・瓦類などは第5層中からの出土である。検出遺構の性格については、狹小な調査範囲という制約もあり明白ではない。ただ、推定寺域の東辺に該当する東側土壘状地形の北東外堀から、弥生末・古墳時代後期の遺構以外に古代及び中世の遺構形成がうかがわれることは留意される事項であり、TR6の東側及び西側の空間に同様な遺構の拡がりが推測される。この範囲においては、寺院跡存続期のなかで、特に平安時代後半～末における遺構の存在が確認されたことにより、該当期の寺院跡の様相を把握する上でポイントになる場所であると考えられ、推定寺域の北側に建物跡群が所在していた可能性が考慮される。

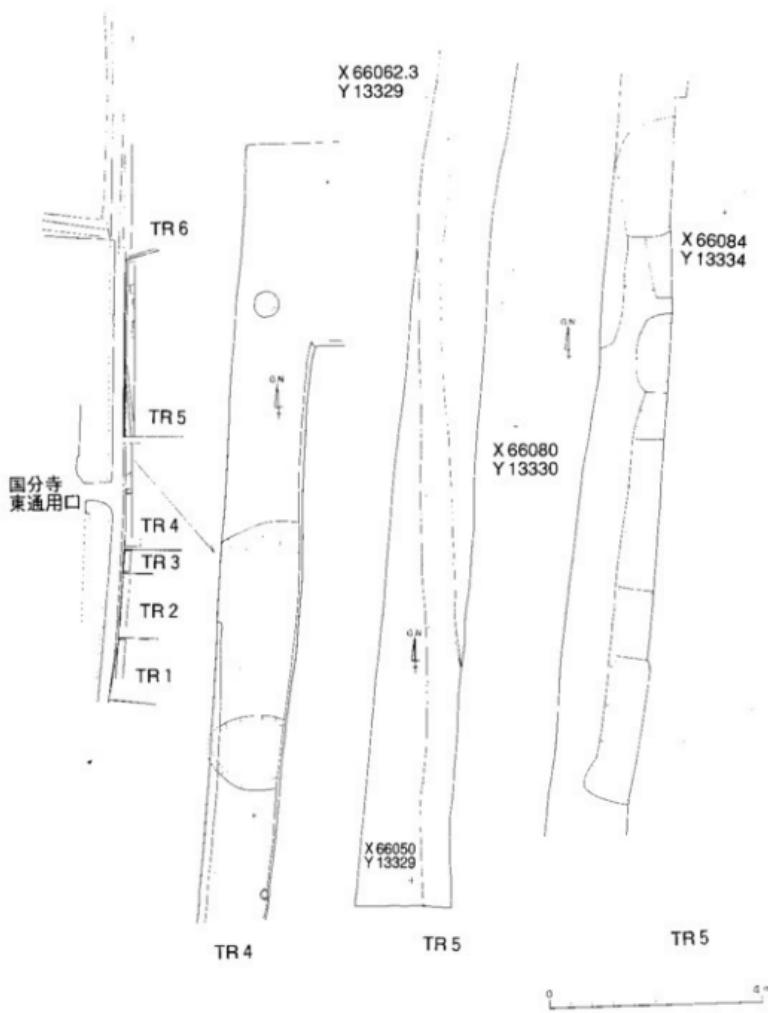


Fig.16 東市道調査区 (TR 1 ~ 5)

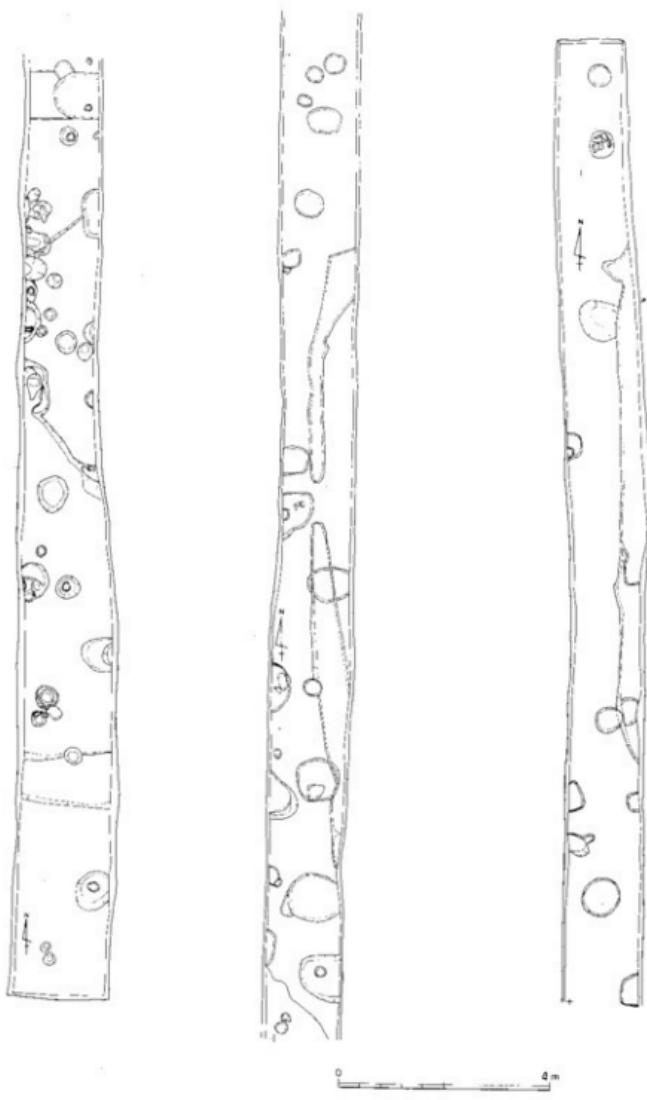


Fig.17 東市道調査区 (TR 6)

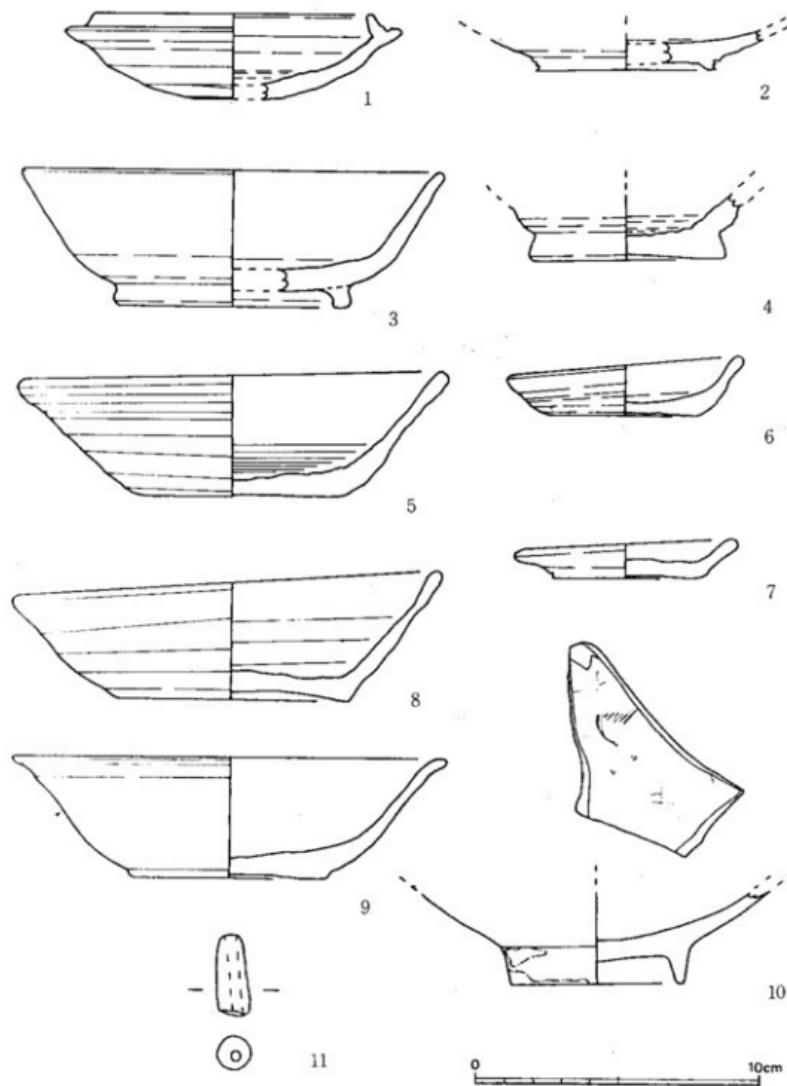


Fig.18 東市道出土遺物

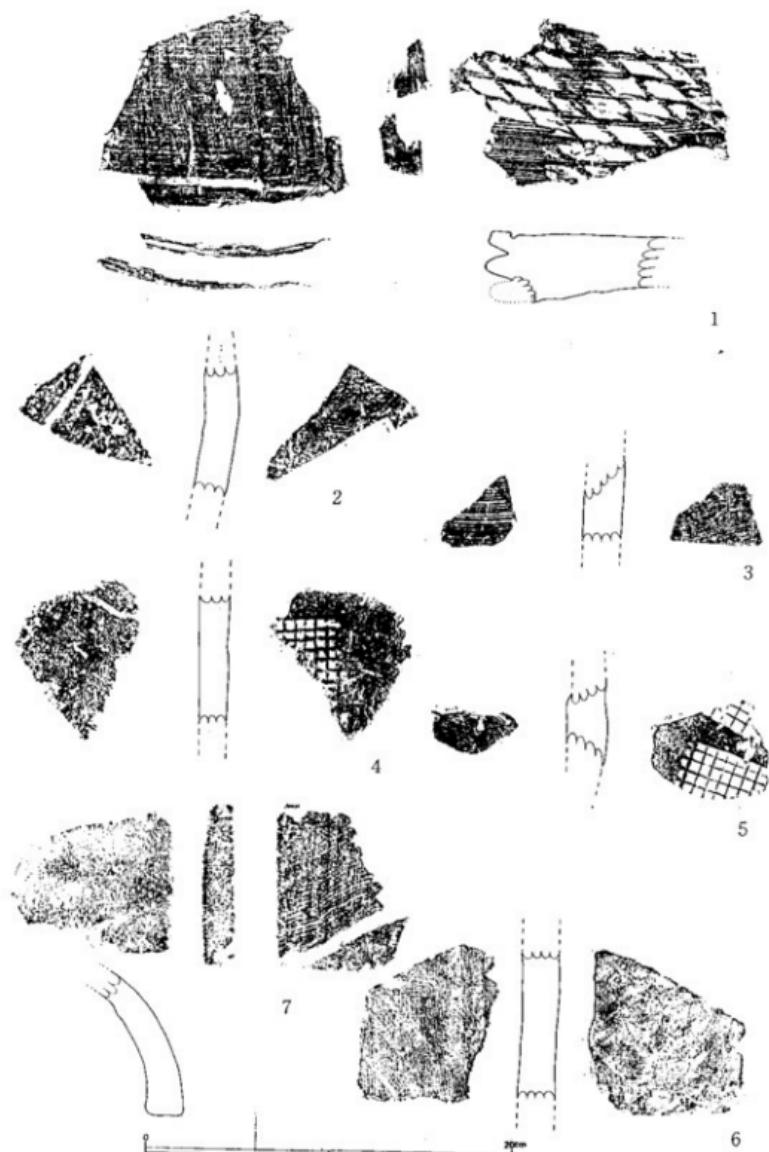
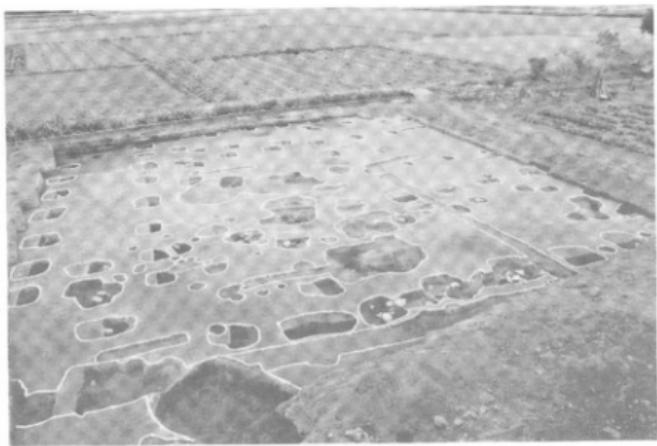


Fig.19 東市道出土瓦



僧房跡検出状態（T-3調査区・南西から）



SB1 検出状態（T-5調査区・東から）

Fig.20 土佐国分寺跡第二次調査

## 第Ⅳ章 まとめ

史跡土佐国分寺跡の現状変更等及び周辺区域での土木工事等に伴う今回の発掘調査では、仁王門・庫裡・参道・市道国分3号線部分の各調査区における地下遺構等の残存状況についての新たな知見を得ることができた。特に参道部分の調査と国分寺東市道（国分3号線）の調査では、国分寺の境内地に東西南北方向のトレンチ調査を施したことになり、同時に調査が進められている主要遺構等確認のための学術調査（昭和62・63年度）の調査地選定等に有益な補足資料をもたらすことになった。なかでも、参道1から検出された建物掘形はその後の学術調査による調査区拡幅等により、創建期の建物跡SB1であることが確認されるなど多大な成果があった。今回の調査区は、調査面積は狭小ではあるが土佐国分寺跡の変遷を探る上で参考となる資料が呈示されている。確認された主要遺構・遺物について、昭和62・63年度の学術調査（1次・2次調査・国庫補助事業）の成果も援用しながらまとめることにしたい。

### 1. 遺構

仁王門地区では、仁王門礎石建物跡（3間×3間）・溝状遺構・ピットが検出されている。しかしいずれも土佐国分寺跡に関連する遺構ではなく、近世に構築された仁王門の礎石跡と、中世（16世紀）に属する溝状遺構とピットである。なお、溝状遺構については仁王門の南端を東西方向に走向し、深さ・幅共に安定している溝跡であることから、戦国時代後半に長宗我部元親が金堂を再建した頃には機能していた溝跡である可能性を帶びている。この溝跡は現在の国分寺寺域南側に所在する水路の東西方向の延長部に該当する位置にあり、関連性が推測される。仁王門の建築は江戸時代以降であるが、この時期に参道の延長として寺域が南側に拡張されたのではなく、16世紀段階の中世において既に、国分寺南側の土壘とそれに伴う水路が存在していた可能性がもたれる。土佐国分寺跡の寺域に関しては、仁王門からさらに北側に位置する慈社南側の残存土壘と東側延長方向の残存土壘を結ぶラインが從来から寺域南限として推定されており（6）、現在の国分寺南側土壘と水路等は後世に拡幅されたものであると考えられている。仁王門地区で検出された溝状遺構は、中世段階での国分寺の南辺部の様相を示す遺構として把握される。なお、調査区は参道1の南側延長部に該当するが、参道1でみられた小ピットの類は検出されてはいない。

庫裡増築地区は、土佐国分寺跡の東南部に該当する。調査地は、国分寺札所の東側隣接地であり、調査面積は100m<sup>2</sup>と面的調査には充分な発掘区であった。検出遺構としては、弥生末～古墳時代初頭（ヒビノキm式併行期）の竪穴住居1棟と近世の大型土坑1基、土坑・柱穴・ピットである。調査区北西端から方形の掘形（1辺70cm）をもつ柱穴跡2個等が検出された以外、寺院跡存続期の関連遺構は検出されなかった。竪穴住居跡は平面方形プランで、その南側の大半は江戸時代の大型土坑SK2により壊されている。当該期の集落形成が明らかで、これまでの国分寺境内内の調査（7）で出土している土器類等と関連を持つ遺構である。

大型土坑SK2は、漆喰壁をもち幕末～明治の瓦類・陶磁器類が投棄された方形土坑SK3の下部から検出された土坑である。SK2の中央部からは、総数150点に及ぶ近世後半～幕末頃の灯明皿類が一括出土している。このうち15点を数える墨書き・受皿が含まれ、判別可能な文字として「厄」「ハリマ」「ヤツイマハ」「厄」「一七」「一四」が見られる(8)。土器類の出土状況としては長方形状の範囲にまとまりが認められ、木箱等に納めて一括埋納していた可能性がある。前記の墨書きは、女性の厄年に関係すると推考され、厄除け祈願の儀式に使用された土器類が儀式後に木箱類などに納められて埋納されたものと推測される。地中に埋納する行為や使用土器類等などについては、現在の法要では行われていないとされ(9)、江戸時代末頃まで伝承の真言密教の呪詛秘儀に関わる祭礼痕跡であることも考えられる。

庫裡増築地区では、SK2上部・SK3にかけて幕末～明治時代の瓦類・陶磁器類が地中に集中投棄されていた。後述する参道1・2の搅乱土坑も同様の類例であると察せられるが、この時期には瓦類・陶磁器類の不燃性の品物の多くが境内地の空間部に廃棄されている。この多数の廃棄跡は、地下遺構の状況把握に阻害要因となっている。

参道地区的調査は、2か年にわたって実施された。本書では便宜上、昭和62年度に実施の仁王門～金堂間を参道1に、中門西側と金堂周辺の一部を参道2として扱い、調査の概要を記することにした。参道1・2から検出された遺構の大半は、幕末～明治時代の瓦類・陶磁器類の廃棄土坑と採土痕跡である。なかでも参道1の北側範囲では、埋土中に遺物を含まない不整形大型土坑か南北方向に連なっており、地山土である黄褐色粘質土を抜き取った採土痕跡であると考えられる。地山土の黄褐色粘質土は、ささ・糞と水を混せて練り合わせると良質の壁土となることから、屋根の瓦下や土壁・家壁などに用材として転用されたことが考えられる。また国分寺には、幕末から明治時代にかけて国分川が氾濫した際、大量の土壌を境内から搬出したとの伝聞が伝わっていることから、場所は特定されないながらもこの遺構と関係することも考慮される。

参道2の金堂周辺の参道部では、主要遺構は検出されなかったが、参道1の鐘楼周辺で方形の掘形を有し且つ南北に並列する柱跡6（北側3・南側3・南北間5.8m）を検出し、さらに柱穴跡の南側から小ピットが検出された。なお、悲社の土壙延長線上のラインでは、参道1では土壙の痕跡や地業痕、溝跡などは検出されなかった。

参道1から検出された南北方向に並列する方形掘形は、一辺1.1m～1.4mの長方形状の掘形をもち、掘形の形状・規模等から建物の柱跡となる可能性が高かった。また、南側の柱穴跡の東側延長方向では、かって鐘楼建立に伴なう調査(10)の際に方形土坑状の遺構が検出されており、出土遺物から弥生期の遺構とされるものの、遺構の配置状況等からみて建物跡を構成する方形掘形の一部となる可能性が予見された。この方形掘形の規模については、これまでに検出されている境内内外からの柱穴跡検出例と比較して極めて大きく、主要遺構として判断されたため、建物跡の全体形状を把握する必要性が生じた。このため、昭和62年度の学術調査で参道東側・鐘楼北側部分を、昭和63年度には参道西側部分について調査区を拡幅した。(11)。

この調査によって、梁間5.8m桁行11.3mを測る三間×六間の東西棟の建物跡（SB1）が検出され、寺院跡創建期の建物跡であることが確認された。また、鐘樓部で検出されていた方形状土坑（報文では貯藏穴）はSB1の南東隅部に該当する掘形であることが判明した。SB1の掘形からは、精査にもかかわらず柱心痕・抜き取り痕が認められず、掘形埋土は軟質であるが淡茶色土と黒褐色土による版築状を呈していた。埋土内からの出土遺物は少なく、僅かに北東隅の掘形内から弥生土器細片・須恵器杯蓋・身・須恵器質の平瓦片が出土しただけである。また、弥生土器の混入は鐘樓部の掘形と同様に弥生時代の包含層を掘り込んで掘形が形成されていたことに起因するものである。

SB1はN16°Eの主軸方位で、創建当初の遺構と考えられている寺域東（南北方向）・南側（惣社南側）の土壘ラインと一致する。また、東西500尺・南北450尺とした場合の推定寺域(12)の中軸線上に位置している。建物跡は、中央部で柱心間が詰まる平面形態を呈し、一部の掘形上部に根石の使用が考えられる15~20cm大の河原石が残存するなど、他の掘立柱建物跡と比べて異質である。礎石は残されてはいないが、礎石下に掘り込み地業を施した礎石建物跡であった可能性も考えられる。従来、中門の推定位置であった場所から門以外の建物跡として検出されたSB1は特異な建物跡であり、新たな問題を提起することになった。なお、掘形の埋土内から出土した瓦片（平瓦・須恵器質・外面カキ目・内面布目痕）は、これまでの土佐国分寺跡出土・採集の瓦類と比較して古相を呈している。

SB1は、掘形内の瓦片の出土により創建期の建物跡とみられるが、その性格については現段階では不明である。しかし、土佐国分寺跡造営に先行する建物跡や造営前の堂舎の存在等が暗示されるなど、SB1は創建期の様相を検討するうえで重要であり、土佐国分寺跡が何故この場所に選定されたのか、また創建前にはどのように土地利用されていたのかなど、多方面な視点で今後議論していくことが必要であると考える。

参道1の調査がSB1の検出に繋がり、土佐国分寺跡の変遷を把握する上で重要な資料を得る契機となった。また寺院跡のように長期間にわたって遺構形成が行われている場所の調査では、部分調査にとどまらずある程度の面的な調査により検討を図ることが肝要であることを提示してくれることになった。なお、調査後のSB1に関しては、SB1の掘形内及び掘形上部を砂で被覆し、SB1の範囲については参道部を含めて遺構検出面から約30cmの厚みで黄色土で盛土を施し、貼り芝区画と掘形中心部の位置に方形石版を据えて、簡易ではあるがSB1の地上遺構表示が国分寺の協力を得て実施されたことを付記しておきたい。

最後に、国分寺東市道の市道国分3号線建設に伴う調査について触れることにする。東市道は、土佐国分寺跡の寺域東の土壠沿いに位置する南北方向の市道である。寺域東の土壠については、創建当初の遺構が遺存しているものと考えられており(13)、寺域復元の際の基本ラインとなっている。しかし、この残存地形が寺院造営時の遺構であるのか、また当初から土壠として構築されたものなのか、築地塙等の遺存地形であるのか否か等については明確な検証資料をもたないまま今日に至っており、地下遺構等の確認が望まれる場所である。現存土壠は、幅約3

約3～4mで竹林・樹木が植生し、寺院境内や市道側の地盤高から約1.5mほどの高まりで累状の地形を残す。現状では腐植土が厚く堆積していることが観察され、拳大の河原石が散在するも古瓦の散布は認められない。寺院境内と市道側はほぼ同じ地盤高であるが、市道東側の畑地・水田地は市道より一段下がった地形を呈している。

今回の調査は、市道東側の路肩拡張に伴うもので、国分寺旧東門付近から寺域北東隅部に至る105.5m間（昭和62年度）と北側延長40m間（昭和63年度）の幅1～2mの範囲である。また、昭和62年度の学術調査においては、国分寺東側入口付近の市道拡幅部分の調査トレンチに直行する形で、さらに東側に延長19.2mの範囲でトレンチを設定し、寺域東限についての確認調査を行った。これらの調査によって、推定寺域東側周辺の状況がある程度判明し、調査地では土佐国分寺跡に関連する溝跡・塙跡等の主要遺構は形成されていないことが確認された。また、国分寺東側入口付近から南側にかけての市道調査範囲では、耕作土下で地山土の礫層となり遺構形成は認められないこと、入口付近の北側から寺域北東隅部にかけての調査範囲では、地山土は小礫混じりの黄褐色粘質土（硬質）で中世（室町後半～戦国時代）の溝跡・ピットが検出されたものの寺院跡関連遺構等は検出されなかったこと、さらに延長部の調査範囲では弥生末・古墳時代後期・平安後半・室町後半～戦国時代の土坑・ピットなどが検出されたが、寺院跡盛行期の関連遺構は形成されていないこと等が確認されている。市道調査範囲に直行した東側確認調査区では、調査区東端から室町時代後半～戦国時代前半の井戸跡が検出されており、中世には屋敷地として利用されていたことが明らかである。

土佐国分寺跡の東限に関しては、現存する土壘状地形を寺域東限を画する遺構の有力候補地として把握することが妥当ではないかと考えるが、土壘状地形の断ち割り調査等による今後の確認調査によって明確にされることが期待される。

なお、今回の調査報告とは直接関連はないが、本年度の学術調査によって現金堂の北側地区から僧坊跡とみられる掘立柱建物跡群が検出され、遺構形成が従来の推定寺域の北限（北側土壘の延長ライン）を越えてさらに北側へと広がることが確認されており（14）、南北450尺の推定寺域の再考と北側土壘の性格について検討する必要性が生じていることを付け加えて置くことにする。

## 2. 遺物

弥生末土器片・須恵器・土師器・青磁・土錐・擂鉢・瓦類（古代・近現代）・近現代陶磁器片・貨幣（古銭）などが出土している。このなかで、量的に多いのは瓦類で、特に近現代の廃棄土坑に投棄されたものが大半である。古代の瓦類については、平瓦及び丸瓦の破片が主で、軒瓦の一部とみられる瓦片の出土数はごく僅かである。また、出土瓦類の内容としては、これまでに発見されている土佐国分寺跡出土瓦類と同様であり、新たな資料は確認されてはいない。全体的には、凸面に格子目の叩きを有する破片が多く、繩目やすり消し無文の瓦片を上回っている。格子目は正格子と斜格子がみられ、施文単位の幅も格差があって必ずしも一律ではない。

出土瓦類は、丸瓦・平瓦の部分破片であり、全体の形状をうかがうことのできる資料は得ることができなかった。寺院跡に関連する瓦類の出土地点と出土数量については、参道2及び1調査地点が最も多く、市道改良部分のTR6と仁王門調査地点がこれに続く。遺物は調査地点の堆積土中からの出土で、近現代の瓦類を除き土坑・瓦溜等の遺構内出土遺物はみられなかった。なお、推定寺域から離れた東市道調査区・TR6からの瓦類の出土は留意される。資料の中には、三重弧文軒丸瓦の破片1が含まれていた。

今回の調査では、参道2調査区から線刻瓦2点が出土しており注目される。1点は焼成前に凸面に線刻が施された須恵器質の瓦片で、絵画風の模様が表現されている。他の1点は凸面に人物顔像が線刻されたものである。この線刻瓦片は、寺院跡存続期の遺物である可能性が高く、生産地の瓦窯で線刻されたものであると考えられるが、供給先の土佐国分寺跡を意識して刻されたのであれば興味深い。文字瓦・墨書きなども未発見である本寺院跡の出土瓦類の中では、国分寺造営にかかわった多数の民衆の存在を伝える資料のひとつとして貴重である。

土佐国分寺跡の瓦類は、これまで5種の軒丸瓦（複弁蓮花纹1種・單弁蓮花纹2種・素弁蓮花纹2種）と1種（三重弧文）2型式（段額・無額）の軒平瓦が確認されている（15）。また、瓦窯については国分川と新改川の上流域に位置する土佐山田町・須江古窯跡群のうち新改西ノ谷二号窯跡や楠目長谷山窯跡が該当すると考えられている（16）。同瓦窯跡からは、土佐国分寺跡出土瓦類と同様な格子目叩きをもつ平瓦片等が採集されている（17）。これらの瓦窯跡から土佐国分寺跡までは、新改川と国分川による水運が利用されていたことが想定される。

瓦類の構成については、遺構内からの共伴資料に乏しく5種の軒丸瓦の先後関係など不明な点が多い。平瓦・丸瓦の凸面格子目叩きにおいても格差があり、セット関係の把握など課題が残されている。寺院跡・窯跡からの出土資料の相互比較による詳細な検討作業が必要である。

その他、出土土器類については須恵器・土師器共に遺構内からの良好な一括資料は得られておらず、土佐国分寺跡における土器類の変遷を捉えるうえでは充分な資料に恵まれていない。東市道調査区TR6からの出土土師器等は、平安時代後半～末（12c後半～末）に位置づけられるもので寺院跡存続期の最末期段階ではあるものの、資料の空白を補完する土器類として評価されよう。

近現代の陶磁器類のなかで、庫裡調査区の大型土坑から出土した一括資料は墨書き土器を含むもので注目される。墨書きは「一七」・「一四」・「厄」・「厄」・「ヤヨイマハ」・「ハリマ」（18）などで、銘文から厄除け等の祭礼行事に供されたものであることが類推される。出土した土器類の形態・特徴などから江戸時代（幕末）から明治初頭にかけての所産であると推測されるが、このような祭具を用いた祭礼は、現在の国分寺では行われておらず、大型土坑の意義や墨書き土器等の埋納行為について脈絡を辿ることはできない。近世から現代に至る過程において、祭礼方式も簡略化等の変化を遂げてきており、祭礼方法が古文書などで後世に継承されたり祭具一式が残されていない限り、当時の祭礼方法について既に現代では解釈でき難くなっていることが理解される。

註

- 1 岡本健児・廣田典夫・宅間一之『土佐國分寺』鐘樓建立・書院改築に伴う発掘調査  
国分寺 1978
- 岡本健児・廣田典夫・宅間一之『土佐國分寺』庫裡改築に伴う発掘調査概報  
国分寺 1979
- 宅間一之『土佐國衙ならびに国分寺の考古学的研究』〔高知の研究1 地質・考古篇〕  
清文堂出版 1983
- 2 山本哲也『土佐國分寺跡』第一次発掘調査概報 南国市教育委員会 1988  
山本哲也『土佐國分寺跡』第二次発掘調査概報 南国市教育委員会 1989
- 3 註1 上段・中段文献
- 4 註2 文献
- 5 岡本桂典氏の御教示による。
- 6 岡本健児『高知県の考古学』 吉川弘文館 1966
- 岡本健児『第六土佐』『新修国分寺の研究』第5巻上 南海道 吉川弘文館 1987
- 7 註3 文献と同じ
- 8 判別不能な文字があるが、他の文言も記されていたようである。墨書土器15点の  
使用文字による内訳は、「厄」5(「厄」1)・「ヤツイマハ」3・「ハリマ」  
1・「一七」2・「一四」1・不明3である。
- 9 国分寺林廣裕住職の御教示による。
- 10 註1上段文献
- 11 註2文献
- 12 註6文献
- 13 註12と同じ
- 14 註2文献
- 15 岡本健児(第三項土佐國分寺の考古学的考察)「第4章第2節」『南国市史』 南国市  
1979年
- 16 註15文献 P.442
- 17 廣田典夫「古代の窯業」「土佐山田町史」 土佐山田町 1979年
- 18 墨書銘のうち「ヤツイマハ」・「ハリマ」は「矢追魔破」・「破利魔」又は「波璃摩」  
に当たるようが定かではない。あるいは、孔雀經法などによる密教用語の音声表  
記であるかもしれない。語源は、魔破・破魔など、破邪を意図する言葉ではないか  
と解釈される。
- 銘文の使用用語は、真言密教における厄除けの儀式において唱えられていた經文  
を字形化したものと推測される。一般的には、「破魔弓」・「波璃」(水晶玉)など  
の用例が参照される。

図版



参道 2 出土線刻瓦（縮尺 4/5）



土佐国分寺跡遠景（南西から）



調査風景（金堂から参道方向にかけて）

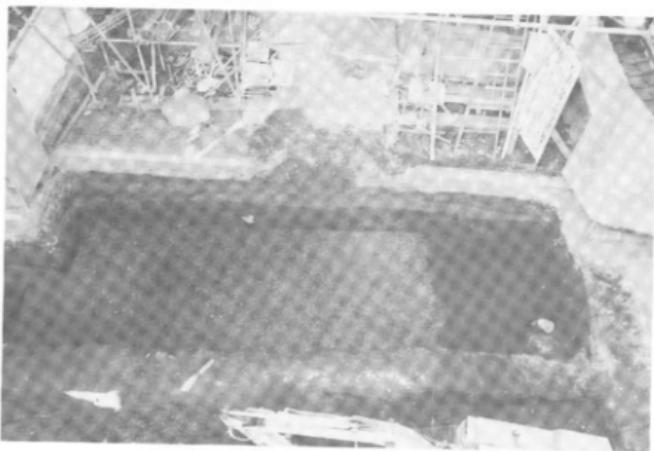


仁王門調査前（西より）

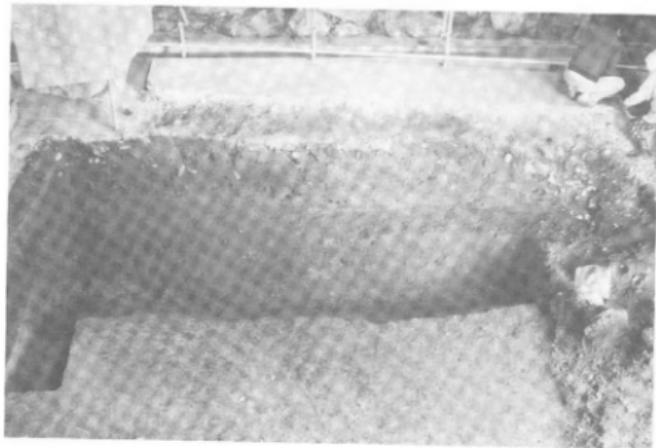


礎石検出状態（西より）

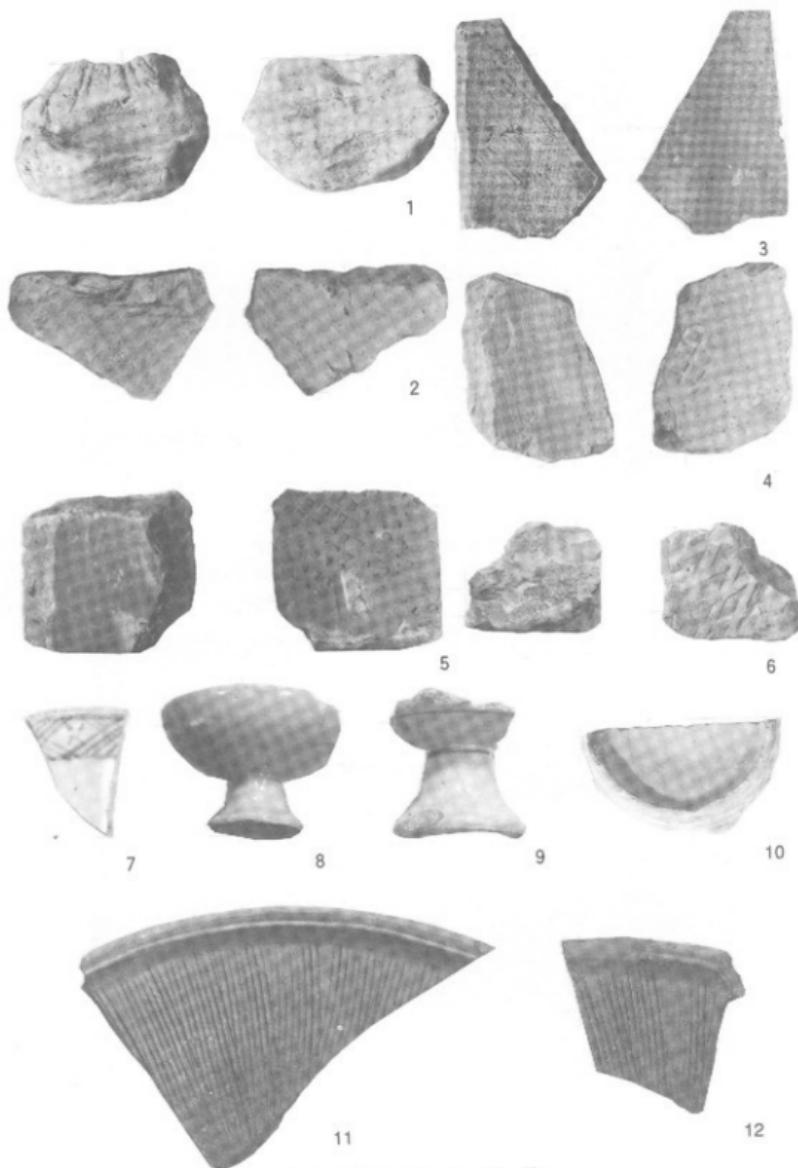
仁王門



仁王門溝検出状況（西より）



仁王門溝跡（西より）

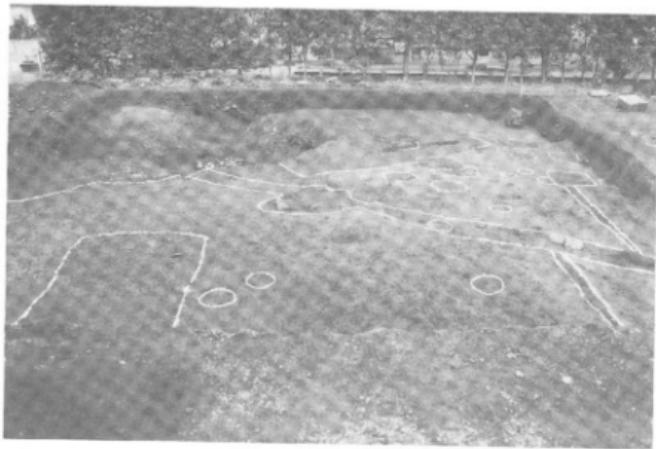


仁王門出土遺物

仁王門



庫裡調査区（調査前、南東から）

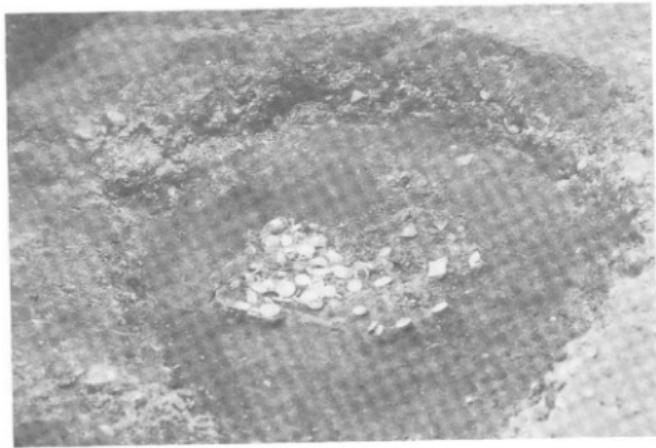


庫裡調査区（遺構検出状況、東から）

庫裡



庫裡調査区全景（東から）

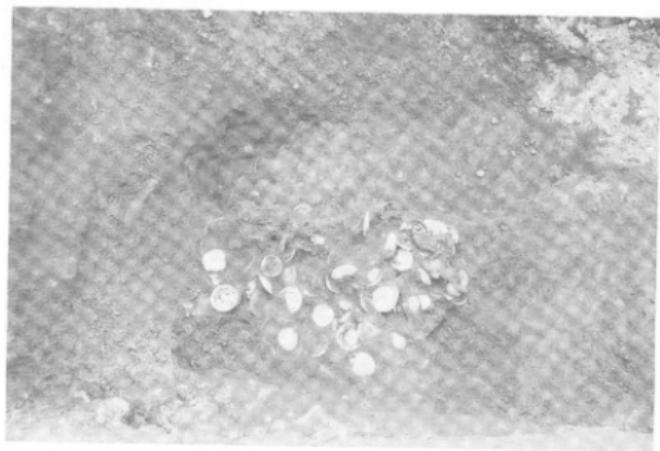


SK2検出状態（南から）

庫裡



SK2 遺 物 出 土 状 態 (南西から)



同 上 ( 南 か ら )

庫 裡



1



2



3



4



5



6



7



8



9



12



14



13



11



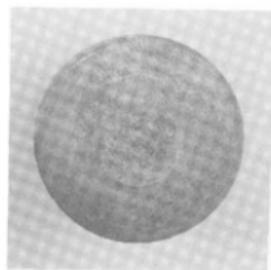
10



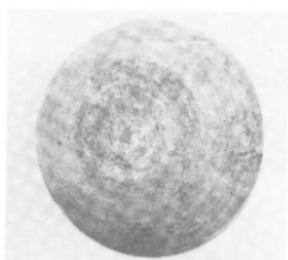
15



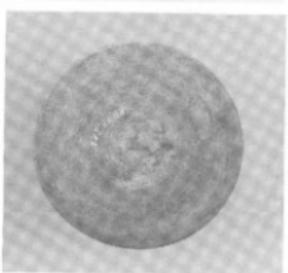
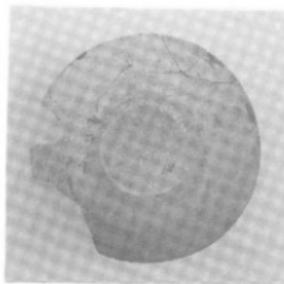
17



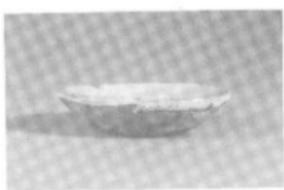
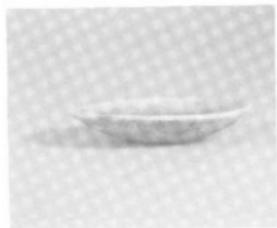
18



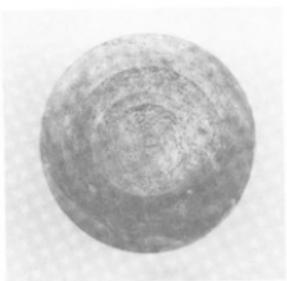
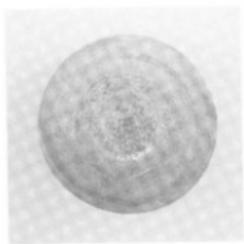
16



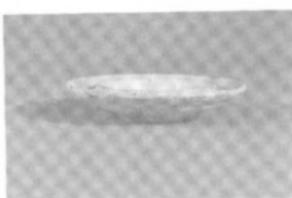
27



19

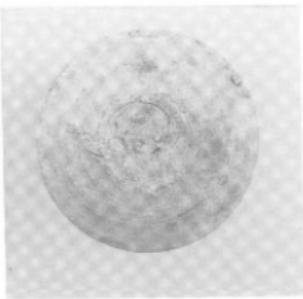


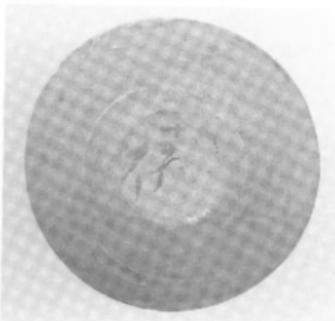
21



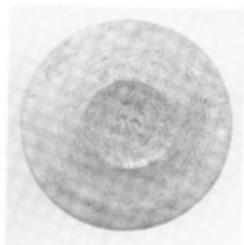
24

25

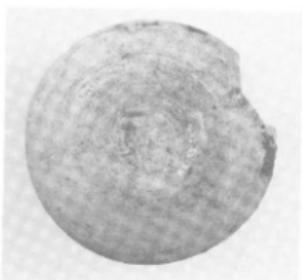




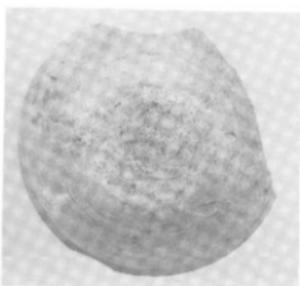
\* 22



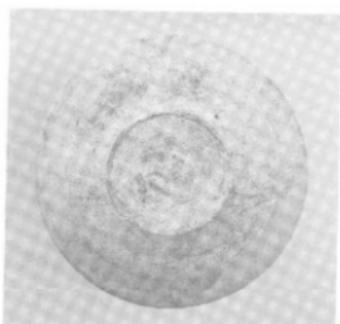
28



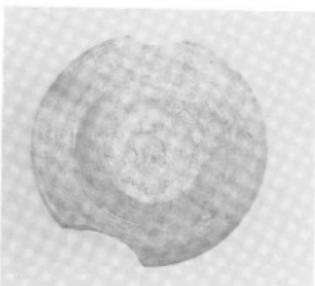
20



26



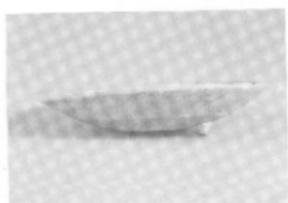
23



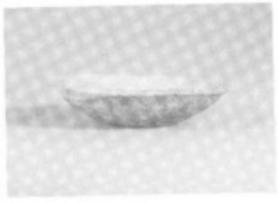
29

庫裡調査区 SK2 出土遺物 4

庫裡



36



34



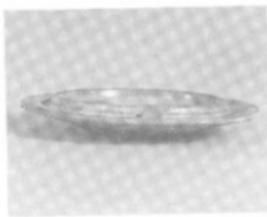
39



40



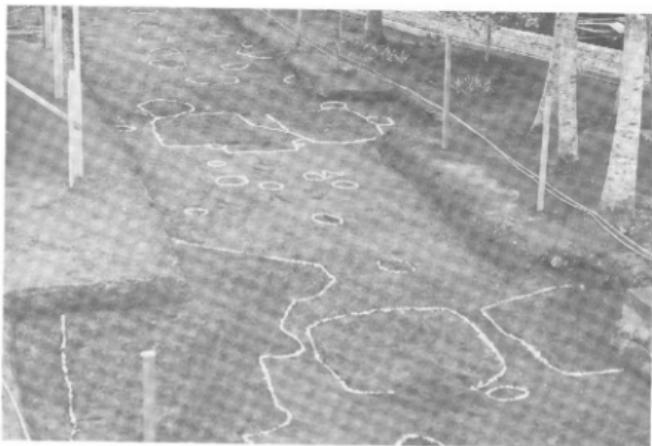
41



42

庫裡調查区SK2出土遺物5

庫裡



SB1 検出状況（北東から・左手は現鐘櫓）

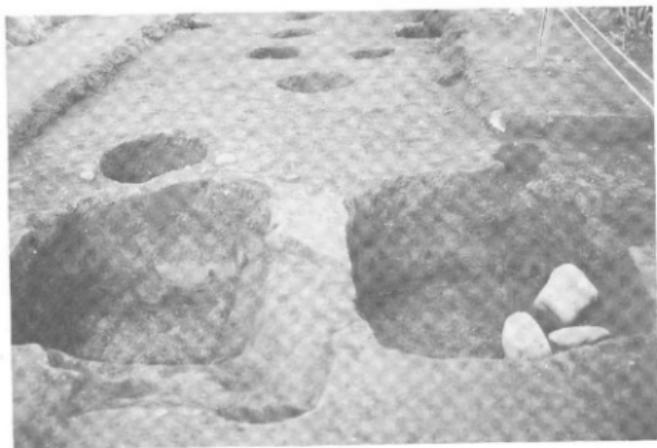


参道1 調査区全景（金堂より仁王門方向を見る）

参道1



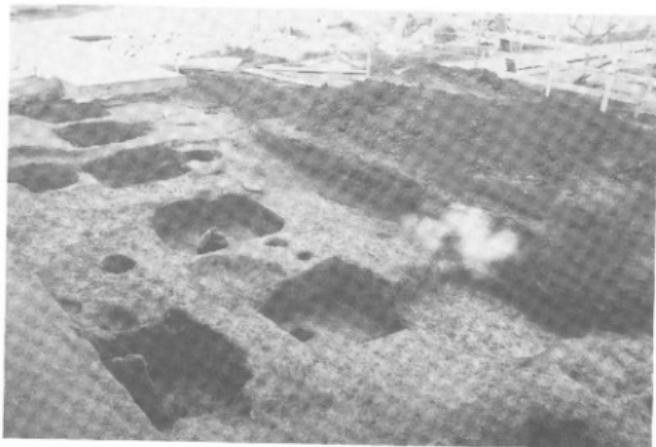
SB1 挖形（北側掘形・南東から）



同上（南側掘形・北から）



SB1 挖形（南側掘形・東から）



SB1 検出状況（手前T-4調査区・南東から）



調査区近景（金堂前・東から）



同上（南から）

参道 1



大型土坑検出状態（南から）



同上（北西から）

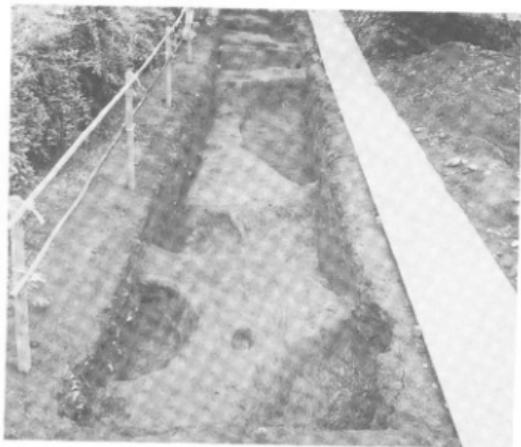


参道 2 調査区（南西から）

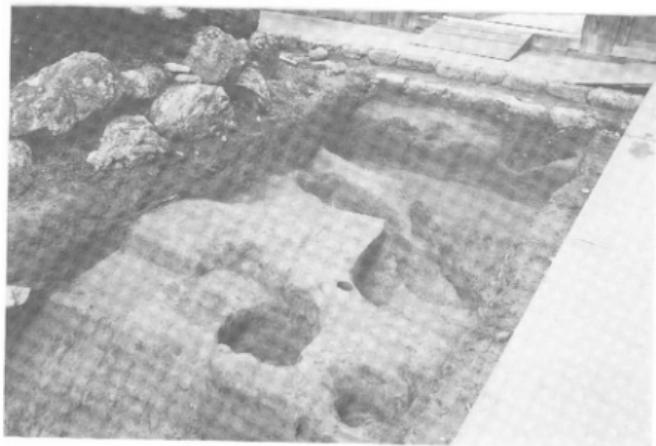


遺構検出状態（中門・東から）

参道 2



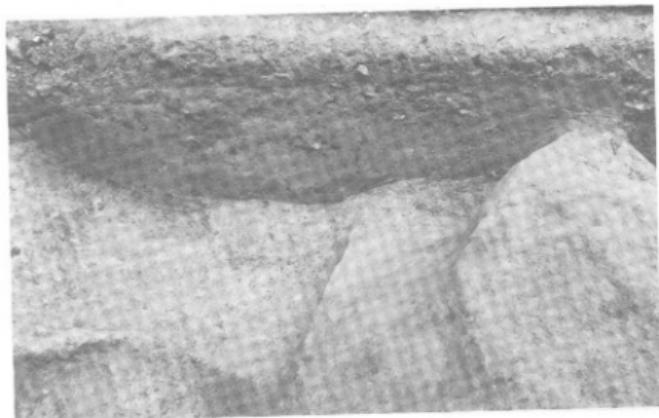
参道 2 遺構近景（西から）



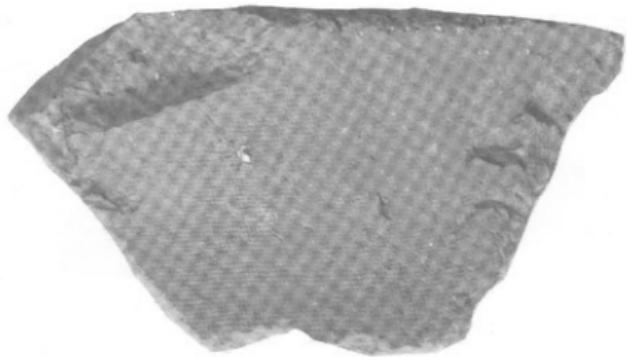
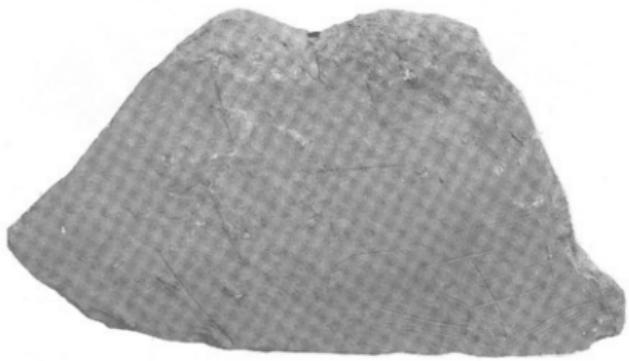
同上（中門への入口付近・南西から）



溝状遺構 確検出状態（南西から）

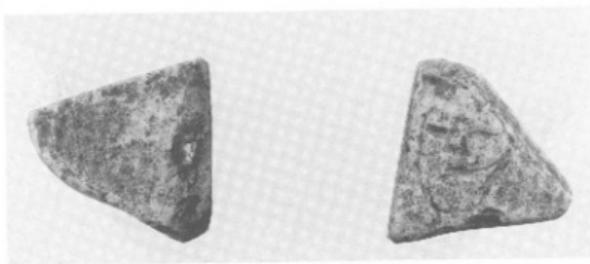
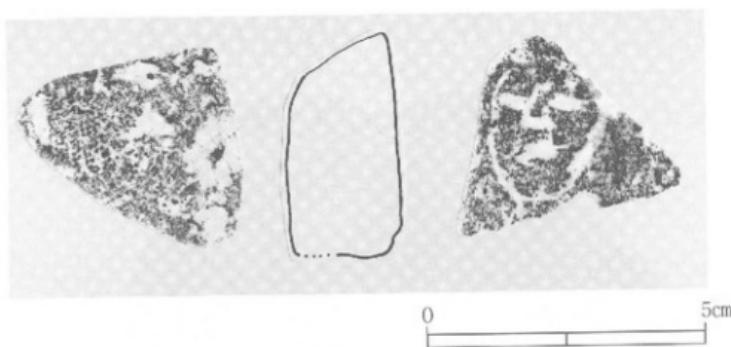


調査区北壁土層堆積状況（南から）



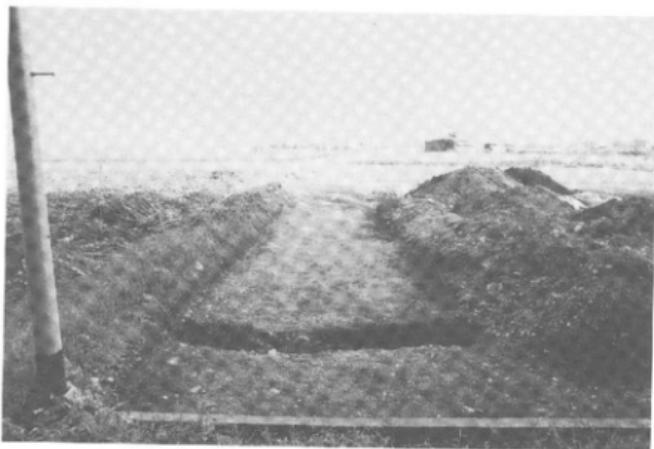
參道檢出線刻瓦

參道 2

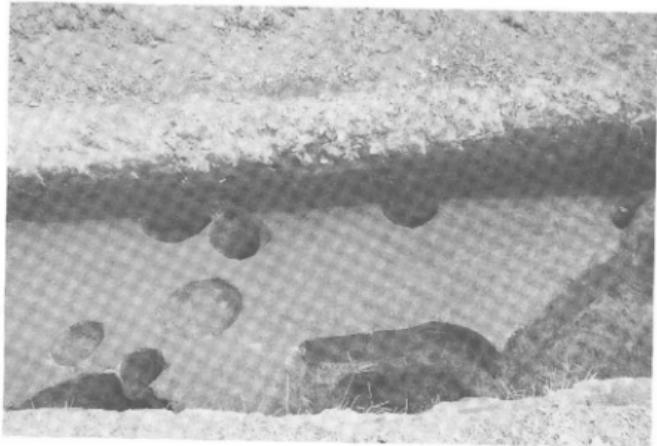


参道検出線刻瓦

参道 2

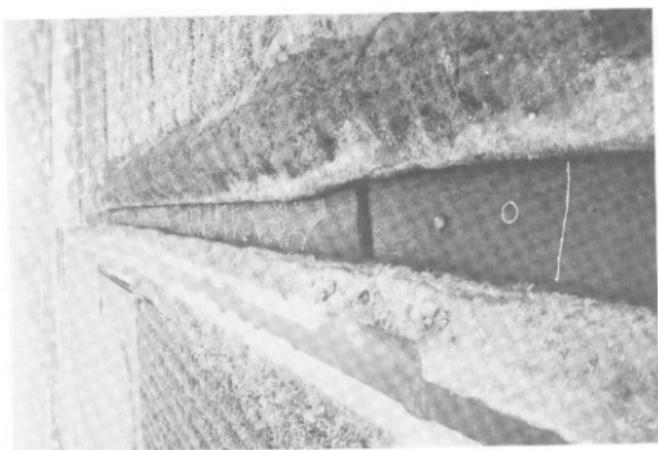


TR4 (西から・東側はT-2T調査区)

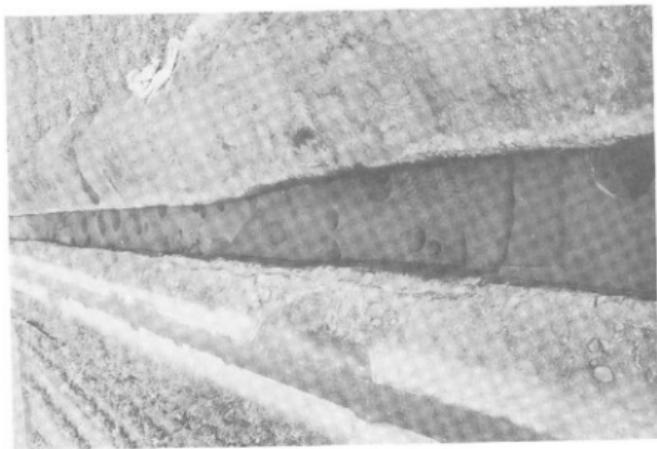


TR6 (西から)

東市道



TR6 遺構確認状態（南より）

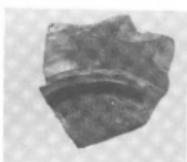


TR6 遺構検出状態（南より）

東市道



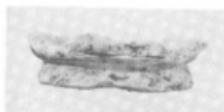
1



2



5



4



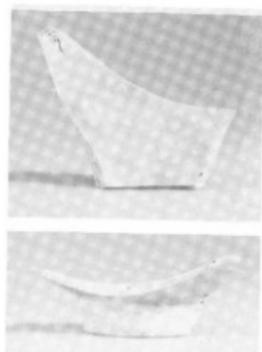
6



7



9



10

東市道 T R 6 出土遺物

東市道